

平成30（2018）年

# 植物防疫年報

平成31（2019）年3月

栃木県農業環境指導センター

# 目 次

## 第1章 病虫害発生予察事業等植物防疫関連事業の具体的内容

- 1 [病虫害発生予察事業](#)…………… 1
- 2 [指定有害動植物等発生予察効率化の推進](#)…………… 1
- 3 [病虫害侵入警戒調査](#)…………… 1

## 第2章 病虫害発生予察事業

- 1 [対象作物と有害動植物の種類](#)…………… 3
- 2 病虫害発生予察情報の提供
  - 1) [病虫害発生予察情報（平成30\(2018\)年1月～12月）](#)…………… 4
  - 2) [病虫害発生予察データ](#)…………… 5
  - 3) [病虫害発生予報](#)…………… 6
  - 4) [いちご病虫害情報](#)…………… 30
  - 5) [病虫害発生予察特殊報](#)…………… 43
  - 6) [植物防疫ニュース（速報）](#)…………… 53
- 3 主要農作物病虫害の発生状況と原因解析（平成29(2017)年確定）
  - 1) [普通作物](#)…………… 71
  - 2) [野菜](#)…………… 72
  - 3) [果樹](#)…………… 76
  - 4) [花き](#)…………… 77
- 4 主要農作物病虫害の発生状況と原因解析（平成30(2018)年速報）
  - 1) [普通作物](#)…………… 78
  - 2) [野菜](#)…………… 79
  - 3) [果樹](#)…………… 82
  - 4) [花き](#)…………… 83
- 5 病虫害発生程度別面積
  - 1) [平成29\(2017\)年病虫害発生程度別面積（確定）](#)…………… 84
  - 2) [平成30\(2018\)年病虫害発生程度別面積（速報）](#)…………… 86
- 6 [病虫害診断依頼結果](#)…………… 88
- 7 病虫害侵入警戒調査
  - 1) [チチュウカイミバエ侵入警戒調査](#)…………… 106
  - 2) [りんご火傷病発生警戒調査](#)…………… 106

### 第3章 予察調査

1	病虫害発生予察調査における地域区分図	
1)	<a href="#">市町と県地域区分図</a> .....	107
2)	<a href="#">農業振興事務所担当地域区分図</a> .....	107
2	予察調査ほ場及び乾式予察灯等の設置状況	
1)	<a href="#">普通作物病虫害発生予察ほ場</a> .....	108
2)	<a href="#">野菜病虫害発生予察ほ場</a> .....	110
3)	<a href="#">果樹、花き病虫害発生予察ほ場</a> .....	113
4)	<a href="#">乾式予察灯設置状況</a> .....	114
5)	<a href="#">フェロモントラップ設置状況</a> .....	114
6)	<a href="#">粘着板設置状況</a> .....	116
3	各種調査結果	
1)	水稲病虫害調査結果	
(1)	<a href="#">病虫害発生予察ほ場における病虫害の発生状況</a> .....	118
(2)	<a href="#">育苗箱における病害の発生状況</a> .....	120
(3)	<a href="#">再生稲における黄萎病、縞葉枯病の発生状況</a> .....	121
(4)	<a href="#">アメダスデータによるいもち病感染好適日の出現状況</a> .....	122
(5)	<a href="#">ウンカ類、ヨコバイ類の越冬前密度</a> .....	124
(6)	<a href="#">大麦におけるヒメトビウンカ生息密度</a> .....	124
(7)	<a href="#">ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の経年変化</a> .....	125
(8)	<a href="#">イネミズゾウムシの発生状況</a> .....	126
(9)	<a href="#">イネドロオイムシの発生状況</a> .....	128
(10)	<a href="#">ニカメイガの発生状況</a> .....	128
(11)	<a href="#">病虫害発生予察ほ場における害虫発生状況(すくいとり調査)</a> .....	131
(12)	<a href="#">斑点米カメムシ類の発生状況</a> .....	133
(13)	<a href="#">水稲害虫の60W予察灯による誘殺数</a> .....	141
(14)	<a href="#">ヒメトビウンカの黄色粘着板による誘殺数</a> .....	147
2)	麦類病害調査結果	
(1)	<a href="#">病害発生予察ほ場における病虫害年次別発生状況</a> .....	149
(2)	<a href="#">麦類縞萎縮病発生状況</a> .....	149
(3)	<a href="#">赤かび病発生状況</a> .....	149
3)	大豆病虫害調査結果	
(1)	<a href="#">病虫害発生予察ほ場における病虫害発生状況</a> .....	150
(2)	<a href="#">病虫害発生予察ほ場における被害粒発生状況</a> .....	153
(3)	<a href="#">吸実性カメムシ類のフェロモントラップによる誘殺数</a> .....	154
(4)	<a href="#">コガネムシ類の予察灯による誘殺数</a> .....	157

4) 野菜類病害虫調査結果	
(1) <a href="#">いちご</a> .....	159
(2) <a href="#">トマト</a> .....	160
(3) <a href="#">なす</a> .....	161
(4) <a href="#">きゅうり</a> .....	162
(5) <a href="#">にら</a> .....	163
(6) <a href="#">ねぎ</a> .....	164
(7) <a href="#">たまねぎ</a> .....	165
(8) <a href="#">キャベツ</a> .....	166
(9) <a href="#">レタス</a> .....	167
5) 果樹類病害虫調査結果	
(1) <a href="#">なし</a> .....	168
(2) <a href="#">ぶどう</a> .....	168
(3) <a href="#">りんご</a> .....	169
6) 花き類病害虫調査結果	
(1) <a href="#">きく</a> .....	169
7) その他調査結果	
(1) <a href="#">カメムシ類の誘殺数(斑点米カメムシ類除く)</a> .....	171
(2) <a href="#">チョウ類のフェロモントラップによる誘殺数(ニカメイガ除く)</a> .....	174
(3) <a href="#">有翅アブラムシ類の黄色粘着板による誘殺数</a> .....	188
(4) <a href="#">アザミウマ類の青色粘着板による誘殺数</a> .....	190
4 主要農作物生育、作柄の概要	
1) 農作物生育状況	
(1) <a href="#">普通作物</a> .....	193
(2) <a href="#">野菜</a> .....	196
(3) <a href="#">果樹</a> .....	200
(4) <a href="#">花き</a> .....	201
2) <a href="#">気象経過</a> .....	202
3) <a href="#">気象表</a> .....	204

第4章	発生予察効率化調査	
1	薬剤感受性検定	
	<a href="#">トマト、いちごの灰色かび病の薬剤感受性検定結果</a>	207
2	<a href="#">大豆のマメシクイガの発生実態調査</a>	213
第5章	農薬安全対策事業	
1	農薬安全使用推進事業	
1)	<a href="#">危害防止運動の推進</a>	215
2)	<a href="#">農薬管理指導士等認定講習会の開催</a>	215
3)	<a href="#">農作物等病害虫雑草防除指針の作成</a>	215
4)	<a href="#">農薬販売者及び農薬使用者の取締状況</a>	215
第6章	栃木県農業環境指導センターの概要及び沿革	
1	<a href="#">組織体制</a>	217
2	<a href="#">業務内容</a>	217
3	<a href="#">沿革</a>	218

※本誌掲載の地図は『白地図 KenMap』を使用して作成しました。

# 第1章 病虫害発生予察事業等植物防疫関連事業の具体的内容

## 1 病虫害発生予察事業

植物防疫法第23条（国の発生予察事業）及び同法第31条（都道府県の発生予察事業）に基づき、指定有害動植物及び重要病虫害を対象として発生予察を行い、精度の高い発生予察情報を提供した。

### 1) 指定有害動植物及び県重要病虫害の発生予察

指定有害動植物79種及び重要病虫害51種（いずれも類を含む）を対象に、乾式予察灯4か所、定点調査ほ186か所（水稻39か所、麦20か所、大豆15か所、果樹類25か所、野菜類80か所、きく7か所）及び巡回調査ほ等を定期的に調査するとともに、病虫害防除員、関係機関等との連携による現地情報や各種気象情報等を総合的に分析検討し、農作物の病虫害発生予察を行った。

### 2) 病虫害発生予察情報の提供

「植物防疫事業実施要領の運用について」（昭和60年8月26日付60農蚕第4430号通知）に基づき、「発生予報」を毎月1回提供したほか、「特殊報」を4回発表した。また、県独自の情報として「いちご病虫害情報」を毎月1回、「植物防疫ニュース」（速報）を10回発表した（平成30年1月～12月まで）。

これらすべての情報は「ホームページ」及び電子メールを活用し、関係機関・団体・生産者等に対し、迅速に提供した。

## 2 指定有害動植物等発生予察効率化の推進

精度の高い予察情報の提供と適正な病虫害防除を推進するため、発生予察手法の高度化や各種の調査を実施した。

### 1) 薬剤感受性（抵抗性）調査

- ① いちご、なしのナミハダニ雌成虫及び卵に対する主要薬剤の殺虫効果について
- ② トマト、いちごの灰色かび病の薬剤感受性検定結果1
- ③ トマト、いちごの灰色かび病の薬剤感受性検定結果2

### 2) その他調査

大豆のマメシンクイガの発生実態調査

## 3 病虫害侵入警戒調査

### 1) チチュウカイミバエ侵入警戒調査

我が国未発生のチチュウカイミバエの発生を警戒するため、侵入の危険性が高いと推察される地点に誘因トラップを設置して調査を行った。

### 2) りんご火傷病発生警戒調査

我が国未発生のりんご火傷病の発生を警戒するため、りんご及びなしの発生予察調査地点での調査にりんご火傷病を加えて調査を行った。

#### 4 病害虫防除員の設置

植物防疫法第33条に基づき、病害虫防除所の業務に関する現地情報及び協力を得るため、病害虫防除員（27名）を委嘱し、フェロモントラップを活用した害虫発生状況調査等を実施した。

平成30(2018)年度病害虫防除員設置状況

No	市町村名	フェロモントラップ						対象作物
		ニカメイガ	クモヘリカメムシ	ホソヘリカメムシ	果樹カメムシ類 (チャバナ等)	ハスモンヨトウ	オオタバコガ	
1	宇都宮市				○			なし
2	上三川町	○						水稲
3	上三川町						○	いちご
4	鹿沼市					○		いちご
5	日光市			○				大豆
6	芳賀町					○		大豆
7	小山市					○		いちご
8	矢板市				○			りんご
9	矢板市		○					水稲
10	那須烏山市				○			なし
11	大田原市					○		大豆・いちご
12	那須町						○	なす
13	佐野市				○			なし
14	益子町			○				大豆
15	茂木町		○					水稲
16	市貝町	○						水稲
17	真岡市						○	なす
18	栃木市					○		トマト
19	下野市	○						水稲
20	壬生町						○	なす
21	野木町					○		みずな
22	さくら市			○				大豆
23	塩谷町					○		露地菊
24	高根沢町						○	なし
25	那珂川町						○	トマト
26	那須塩原市			○				大豆
27	足利市					○		いちご

## 第2章 病害虫発生予察事業

### 1 対象作物と有害動植物の種類

指定: 指定有害動植物(国の発生予察事業) 重要: 重要病害虫(県の発生予察事業)

対象作物名	種類	病害虫名
稲	指定	イネミズゾウムシ、コブフメイガ、セシロウンカ、ツマクロヨコバイ、トビイロウンカ、ニカメイガ、斑点米カメムシ類「ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ」、ヒメトビウンカ、フタオビコヤガ、稲こうじ病、いもち病、縞葉枯病、ばか苗病、もみ枯細菌、紋枯病
	重要	イチモンジセセリ、イナゴ類、イナズマヨコバイ、イネドロオイムシ、苗立枯病、黄萎病
麦	指定	赤かび病、うどんこ病
	重要	さび病類、縞萎縮病、斑葉病、黒節病
大豆	指定	アブラムシ類、吸実性カメムシ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ
	重要	コガネムシ類、マメシンクイガ、シロイチモジマダラメイガ、フタスジヒメハムシ、紫斑病、べと病
なし	指定	アブラムシ類、シンクイムシ類、ハダニ類、ハマキムシ類、カメムシ類、黒斑病、黒星病
	重要	赤星病
ぶどう	指定	晩腐病、灰色かび病、べと病
	重要	アザミウマ類、ハマキムシ類、黒とう病
りんご	指定	シンクイムシ類、ハダニ類、ハマキムシ類、黒星病、斑点落葉病
	重要	アブラムシ類、輪紋病、褐斑病、赤星病
トマト	指定	アブラムシ類、コナジラミ類、ハスモンヨトウ、疫病、灰色かび病、葉かび病
	重要	ハモグリバエ類、タバコガ類、モザイク病、黄化葉巻病、すすかび病、青枯病、萎凋病
きゅうり	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、コナジラミ類、ハスモンヨトウ、うどんこ病、褐斑病、灰色かび病、べと病
	重要	ハモグリバエ類、疫病、黄化えそ病
なす	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ、灰色かび病、うどんこ病
	重要	タバコガ類、半身萎凋病、青枯病
いちご	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、うどんこ病、炭疽病、灰色かび病
	重要	コナジラミ類、萎黄病
キャベツ	指定	アブラムシ類、ハスモンヨトウ、コナガ、ヨトウガ、黒腐病、菌核病
	重要	-
レタス	指定	アブラムシ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ、ヨトウガ、灰色かび病、菌核病
	重要	軟腐病
たまねぎ	指定	アザミウマ類、白色疫病、べと病
	重要	さび病、黒斑病
ねぎ	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、ハスモンヨトウ、黒斑病、さび病、べと病
	重要	ハモグリバエ類、ネギコガ、萎縮病
にら	指定	-
	重要	ネダニ類、白斑葉枯病、乾腐病、さび病、株腐細菌病
きく	指定	アザミウマ類、アブラムシ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、白さび病
	重要	ハダニ類
作物共通	指定	オオタバコガ(トラップ・なす・レタス)、シロイチモジヨトウ(いちご・きく・大豆・なす・レタス)、ハスモンヨトウ(トラップ・いちご・きく・キャベツ・きゅうり・大豆・トマト・なす・ねぎ・レタス)、ヨトウガ(キャベツ・レタス)、コナガ(トラップ・キャベツ)、果樹カメムシ類(トラップ・なし)
	重要	-
指定有害動植物		総計 15作物 計79種(類を含む)
重要病害虫		総計 16作物 計51種( )

## 2 病害虫発生予察情報の提供

### 1) 病害虫発生予察情報（平成30年1月～12月）

種類	発表回数	号数	備考（発表日）			
発生予報	12回	第10号	1月19日	2月16日	3月16日	4月20日
		(H29)	5月17日	6月15日	7月20日	8月24日
		～第9号	9月21日	10月19日	11月16日	12月21日
いちご 病害虫情報	12回	第8号	1月19日	2月16日	3月16日	4月20日
		(H29)	5月17日	6月15日	7月20日	8月24日
		～第7号	9月21日	10月19日	11月16日	12月21日

特殊報	4回	第1号	ブドウミタマバエ(仮称)のブドウでの発生について	8月17日
		第2号	ミツユビナミハダニのトマトでの発生について	10月 3日
		第3号	オウトウショウジョウバエ類のいちごでの発生について	10月 4日
		第4号	トルコギキョウ斑点病の発生について	12月20日
植物防疫 ニュース	10回	第13号	いちごのアザミウマ類による春先の被害増加を、適期防除で抑えましょう！	2月28日
		第1号	麦類の赤かび病発生に注意しましょう！	4月 9日
		第2号	クビアカツヤカミキリの発生に注意しましょう！	4月26日
		第3号	イネ縞葉枯病(ヒメトビウンカ媒介)の防除を実施しましょう！	5月30日
		第4号	今後の斑点米カメムシ類の動向に注意しましょう！	6月27日
		第5号	大豆のべと病・紫斑点病の発生に注意しましょう！	7月27日
		第6号	斑点米カメムシ類の発生が急増しています！	7月27日
		第7号	イチゴ炭疽病、イチゴ萎黄病の発生に注意しましょう！	7月31日
		第8号	オオムギ斑葉病の発生が増えています 種子消毒を徹底しましょう！	9月21日
第9号	イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の高い地点が確認されています	12月11日		

## 2) 病害虫発生予察データ

### (1) BLASTAMによる葉いもち感染好適日の判定結果

対象作物	調査地点（気象庁観測点名）	調査期間
稲	那須、黒磯、大田原、塩谷、真岡、宇都宮、今市、鹿沼、小山、佐野	6～8月

### (2) 害虫の誘殺数（センター調査）

対象作物	害虫名	調査方法	調査地点	調査期間
稲	ニカメイガ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	宇都宮市、小山市	5～8月
	クモヘリカメムシ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	宇都宮市、芳賀町	6～9月
	ツマグロヨコバイ ヒメトビウンカ アヒゲホトトリスカメ 等	60W 予察灯 (白熱灯)	大田原市、宇都宮市、小山市、栃木市	5～9月
大豆	ホソヘリカメムシ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	宇都宮市、芳賀町、栃木市	5～9月
大豆・野菜	ハスモンヨトウ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	宇都宮市、栃木市	4～11月
果樹	チャバネカメムシ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	宇都宮市、芳賀町	4～9月
	ナシヒメシンクイ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	宇都宮市、芳賀町、那須烏山市	3～10月
	リンゴコカモンハマキ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	宇都宮市、那須烏山市	5～10月
野菜・花き	オオタバコガ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	宇都宮市、栃木市	4～11月
	コナガ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	宇都宮市、栃木市	4～11月
	有翅アブラムシ類	黄色粘着板	宇都宮市、栃木市、 大田原市	4～11月 4～10月
	アザミウマ類	青色粘着板	宇都宮市、栃木市 大田原市、真岡市、下野市	4～11月 4～10月

### (3) 害虫の誘殺数（病害虫防除員等調査）

対象作物	害虫名	調査方法	調査地点	調査期間
稲	ニカメイガ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	上三川町、市貝町、下野市	5～8月
	クモヘリカメムシ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	茂木町、矢板市	6～8月
大豆	ホソヘリカメムシ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	日光市、益子町、さくら市、那須塩原市	5～9月
大豆・野菜	ハスモンヨトウ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	鹿沼市、芳賀町、小山市、大田原市、栃木市、野木町、塩谷町、足利市	6～10月
果樹	チャバネカメムシ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	宇都宮市、矢板市、那須烏山市、佐野市	5～9月
	ナシヒメシンクイ	フェロモントラップ <sup>o</sup>	高根沢町	4～10月

---

## 平成29年度 病害虫発生予報 第10号

平成30年1月19日  
栃木県農業環境指導センター

---

### ○野菜類の病害の増加に注意しましょう！

---

予想期間 1月下旬～2月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

---

#### 1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比190.2%:ほ場率、平年比0%:株率)。(±)  
・向こう1か月の降水量は平年並、日照時間は平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・下葉を除去し、風通しをよくするとともに、適正なかん水管理に留意する。  
・発病した果実、果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。  
・発生状況に応じてフルピカフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・[薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。
- 

#### 2 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比72.2%:ほ場率、平年比60.0%:株率)。(±)  
・向こう1か月の気温は低く、日照時間は平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な温湿度管理やかん水管理を行う。  
・発生を予防するため、硫黄粒剤でくん煙する。  
・発生が見られたらガッテン乳剤等を散布する。
- (4) 備 考 ・硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるため、天敵を導入した場合は長時間のくん煙処理は避ける。
- 

#### 3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比105.9%:ほ場率 平年比91.5%:株率)。(±)  
・向こう1か月の気温は低く、日照時間は平年並の見込み。(±～-)
- (3) 対 策 ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。  
・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。  
・化学薬剤に対する抵抗性発達が著しいため、系統の異なる薬剤のローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しない気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。  
・気門封鎖剤は卵に効果が低いため、5日程度の間隔をおき、複数回散布する。  
また、葉・果実などの傷みを防ぐため、乾きにくい雨天日等の散布を避ける。  
・カブリダニ剤の追加放飼を行う際にハダニ類の発生が目立つ場合は、カブリダニに影響の小さい薬剤を散布してから放飼する。
- (4) 備 考 ・天敵放飼から1～2週間は薬剤散布を避ける。  
・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。
- 

#### 4 いちご アブラムシ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比72.3%:ほ場率、平年比57.1%:株率)。(±)  
・向こう1か月の気温は低く、日照時間は平年並の見込み。(±～-)
- (3) 対 策 ・発生が見られた場合は、モスピラン顆粒水溶剤、ウララDF等を散布する。
- (4) 備 考 ・天敵の放飼を行っている場合は薬剤選定に注意する。
-

## 5 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 掘 ・現在の発生量はやや少ない（平年比134.4%：ほ場率、平年比15.4%：株率）。  
（一）  
・向こう1か月の降水量は平年並、日照時間は平年並の見込み。（±）
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を防ぐ。  
・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。  
・発生状況に応じてベルコートフロアブルやジャストミート顆粒水和剤等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・微生物防除資材（ボトキラー水和剤等）は発病前～発病初期に利用する。また、低温条件では効果が出にくいので、10℃以上が確保できる施設内で使用する。  
・[薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

## 6 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 掘 ・現在の発生量はやや多い（平年比129.3%：ほ場率、平年比220.0%：株率）。（+）  
・向こう1か月の降水量は平年並、日照時間は平年並の見込み。（±）
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。  
・肥料切れ等により生育が衰えると発生しやすいので、肥培管理に注意する。  
・生育状況に応じて、不要な下葉の除去を行う。  
・発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。  
・発生状況に応じてダコニール1000やトリフミン乳剤等を葉裏によくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・抵抗性品種に発病するレースが確認されているため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも、発生に注意する。  
・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

## 7 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
いちご	コナジラミ類	平年並	平年並	きゅうり	べと病	やや少	やや少
トマト	うどんこ病	少	少		うどんこ病	やや少	やや少
	コナジラミ類	少	少	きく	ハダニ類	やや多	やや多
にら	白斑葉枯病	少	少				

- 短期暴露評価の導入に伴う農薬の使用方法の変更に注意しましょう！  
 ○農薬は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使いましょう！  
 ○同一系統の薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。  
 ○花粉媒介昆虫（ミツバチ、マルハナバチ）や天敵に対する影響日数を目安に薬剤を選択しましょう。

### 1か月気象予報（予報期間1月20日から2月19日 1月18日気象庁発表）

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、低い確率60%です。降水量は、平年並の確率40%です。日照時間は、平年並の確率40%です。週別の気温は、1週目は、低い確率50%です。2週目は、低い確率50%です。3～4週目は、低い確率50%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
○気温	60%	30%	10%
○降水量	30%	40%	30%
○日照時間	30%	40%	30%

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問い合わせください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

# 平成29年度 病害虫発生予報 第11号

平成30年2月16日  
栃木県農業環境指導センター

## ○果菜類の病害虫の発生増加に注意しましょう！

予想期間 2月下旬～3月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

### 1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比52.5%:ほ場率)。(－)  
・向こう1か月の気温は平年並～低く、日照時間は平年並～少ない見込み。(±～+)
- (3) 対策 ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な温湿度管理やかん水を行う。  
・発生を予防するため、硫黄粒剤でくん煙する。  
・発生が見られたらアフェットフロアブル等を散布する。
- (4) 備考 ・硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるため、天敵を導入した場合は長時間のくん蒸処理は避ける。

### 2 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根拠 ・現在の発生量は平年並(平年比139.6%:ほ場率、平年比25%:株率)。(±)  
・向こう1か月の気温は平年並～低く、日照時間は平年並～少ない見込み。(±～+)
- (3) 対策 ・下葉を除去し、風通しをよくするとともに、かん水は必要最小限にとどめる。  
・発病部位(果実、果梗等)は、伝染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。  
発生初期にファンタジスタ顆粒水和剤等を散布する。
- (4) 備考 ・曇雨天時には、過湿防止のため液剤の使用を控え、くん煙剤等を使用する。  
・[薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

### 3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや少ない**
- (2) 根拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比25.8%:ほ場率、平年比21.4%:株率)。(－)  
・向こう1か月の気温は平年並～低く、日照時間は平年並～少ない見込み。(±～－)
- (3) 対策 ・ハウス内の雑草はアザミウマ類の増殖源になるので除草する。  
・ミツバチや天敵を導入している時期なので、発生が見られる場合はマツ乳剤[ミカンキアザミウマ]等のIGR剤を散布する。  
・花を観察して、その1割以上でアザミウマ類が見られた時は、被害が大きくなる恐れがあるため、スピノエース顆粒水和剤かディアナSCを散布する。
- (4) 備考 ・秋期にアザミウマ類の発生が多かった施設では、注意が必要である。  
・スピノエース顆粒水和剤やディアナSCは、天敵やミツバチへの影響があるので注意する。  
・[病害虫防除対策のポイントNO.19いちごのアザミウマ類](#)、[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

### 4 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根拠 ・現在の発生量は平年並(平年比90.1%:ほ場率、平年比83.2%:株率)。(±)  
・向こう1か月の平均気温は平年並～低く、日照時間は平年並～少ない見込み。(±～－)
- (3) 対策 ・ほ場をこまめに観察し、早期発見に努め、増殖する前に防除を行う。また、初発生は、ほ場の一部から始まりやすいので、発生密度が低い場合は、初発箇所周辺を中心に薬剤の部分散布やカブリダニ類の放飼で対応しても良い。  
・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。  
・化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しない気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。  
・気門封鎖剤は卵に効果が低いため、5日程度の間隔をおき、複数回散布する。  
また、葉・果実の傷みを防ぐため、乾きにくい雨天日等の散布を避ける。

- ・カブリダニ剤の追加放飼を行う際にハダニ類の発生が目立つ場合は、薬剤散布をしてから放飼する。
- (4) 備考
- ・天敵放飼から1～2週間は薬剤散布を避ける。
  - ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

## 5 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根拠
- ・現在の発生量はやや少ない（平年比59%：ほ場率、平年比10.7%：株率）。（-）
  - ・向こう1か月の気温は平年並～低く、日照時間は平年並～少ない見込み。（±～+）
- (3) 対策
- ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。
  - ・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。
  - ・発生状況に応じて、シグナムWDG等を散布する。
- (4) 備考
- ・微生物防除資材（ボトキラー水和剤等）は発病前～発病初期に使用する。
  - ・[薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

## 6 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根拠
- ・現在の発生量は平年並（平年比88.6%：ほ場率、平年比96.5%：株率）。（±）
  - ・向こう1か月の気温は平年並～低く、日照時間は平年並～少ない見込み。（±～-）
- (3) 対策
- ・薬剤がかかりやすい生育初期からの防除を行う。
  - ・葉裏をよく観察し、発生が認められたら下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に気門封鎖剤やコロマイト水和剤等を散布する。
- (4) 備考
- ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

## 7 その他の病害虫

		現況	発生予想			現況	発生予想
いちご	コナジラミ類	平年並	平年並	トマト	コナジラミ類	やや少	やや少
	アブラムシ類	平年並	平年並		きゅうり	うどんこ病	やや多
トマト	葉かび病	平年並	平年並	にら	ネダニ類	平年並	平年並

### 春の病害虫防除対策

#### ○いちご親株床

・親株床には病害虫の発生していない株を選別し、定植しましょう。

#### ○施設野菜類の微小害虫

・施設野菜類のハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類といった微小害虫は、気温の上昇に伴い、急増します。ほ場をこまめに観察し、発生初期の防除を心掛けましょう。

○農薬は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使いましょう！

○短期暴露評価の導入に伴う農薬の使用方法の変更に注意しましょう！

○同一系統の薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

○花粉媒介昆虫（ミツバチ、マルハナバチ）や天敵に対する影響日数を目安に薬剤を選択しましょう。

#### 1か月気象予報（予報期間2月17日から3月16日 2月15日気象庁発表）

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。降水量は、平年並または高い確率ともに40%です。日照時間は平年並または少ない確率ともに40%です。週別の気温は1週目は低い確率ともに60%で、2週目は平年並の確率50%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
○気温	40%	40%	20%
○降水量	20%	40%	40%
○日照時間	40%	40%	20%

詳しくは農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

# 平成29年度 病虫害発生予報 第12号

平成30年3月16日  
栃木県農業環境指導センター

## ○害虫の発生増加に注意しましょう！

予想期間 3月下旬～4月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

### 1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量： **やや少ない**
- (2) 根拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比82.5%：ほ場率)。(－)  
・向こう1か月の降水量および日照時間は平年並の見込み。(±)
- (3) 対策 ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な温湿度管理やかん水を行う。  
・発生を予防するため、硫黄粒剤でくん煙する。  
・発生が見られたらパンチョTF顆粒水和剤等を散布する。
- (4) 備考 ・硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるため、天敵を導入した場合は長時間のくん蒸処理は避ける。

### 2 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量： **平年並**
- (2) 根拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比56.1%：ほ場率、平年比54.5%：株率)。(－)  
・向こう1か月の気温は高く、日照時間は平年並の見込み。(＋)
- (3) 対策 ・ハウス内の雑草はアザミウマ類の増殖源になるので除草する。  
・ミツバチや天敵を導入している時期なので、発生が見られる場合はマツチ乳剤[等のIGR剤を散布する。  
・花を観察して、その1割以上でアザミウマ類が見られた時は、被害が大きくなる恐れがあるため、スピノエース顆粒水和剤かディアナSCを散布する。
- (4) 備考 ・秋期にアザミウマ類の発生が多かった施設では、注意が必要である。  
・スピノエース顆粒水和剤やディアナSCは、天敵やミツバチへの影響があるので注意する。  
・[植物防疫ニュース\(速報No.13\)](#)、[防除のポイントNo.19](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

### 3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠 ・現在の発生量は平年並(平年比89.8%：ほ場率、平年比55.2%：株率)。(±)  
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間は平年並の見込み。(＋)
- (3) 対策 ・ほ場をこまめに観察し、早期発見に努め、増殖する前に防除を行う。また、初発生は、ほ場の一部から始まりやすいので、発生密度が低い場合は、初発箇所周辺を中心に薬剤の部分散布やカブリダニ類の放飼で対応しても良い。  
・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。  
・化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しない気門封鎖剤や天敵製剤を活用する  
・気門封鎖剤は卵に効果が低いため、5日程度の間隔をおき、複数回散布する。  
また、葉・果実の傷みを防ぐため、乾きにくい雨天日等の散布を避ける。  
・カブリダニ剤の追加放飼を行う際にハダニ類の発生が目立つ場合は、薬剤散布をしてから放飼する。
- (4) 備考 ・天敵放飼から1～2週間は薬剤散布を避ける。  
・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

### 4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量： **やや少ない**
- (2) 根拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比99.4%：ほ場率、平年比12.7%：株率)。(－)  
・向こう1か月の降水量および日照時間は平年並の見込み。(±)

- (3) 対策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。  
 ・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。  
 ・予防を基本とし、セイビアーフロアブル20等を散布する。発生が見られたら、ピクシオDF等を散布する。
- (4) 備考 ・微生物防除資材（ボトキラー水和剤等）は発病前～発病初期に使用する。  
 ・[薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

## 5 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠 ・現在の発生量は平年並（平年比134.8%：ほ場率、平年比59.6%：株率）。（±）  
 ・向こう1か月の気温は高く、日照時間は平年並の見込み。（+）
- (3) 対策 ・薬剤がかかりやすい生育初期からの防除を行う。  
 ・葉裏をよく観察し、発生が認められたら下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に気門封鎖剤やスターマイトフロアブル等を散布する。
- (4) 備考 ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

## 6 その他の病害虫

		現況	発生予想			現況	発生予想	
いちご	灰色かび病	やや少	やや少	きゅうり	うどんこ病	やや多	やや多	
	アブラムシ類	平年並	やや多			アザミウマ類	少	やや少
	コナジラミ類	平年並	やや多		にら	ネダニ類	平年並	平年並
トマト	葉かび病	平年並	平年並	きく	アザミウマ類	少	やや少	
	コナジラミ類	やや少	平年並					

### 春の病害虫防除対策

#### ○いちご親株床

・定植ほ場の準備を万全にし、親株への病害虫の寄生がないかよく確認して定植しましょう。また、本ぼと親株床の管理作業を分け、本ぼからの病害虫の持ち込みを避けましょう。

#### ○トマト コナジラミ類、キュウリ アザミウマ類

・気温の上昇に伴い、施設内で越冬したコナジラミ類やアザミウマ類が急増するおそれがあります。コナジラミ類やアザミウマ類を野外に出さないよう、防除を徹底しましょう。特に、タバココナジラミはトマト黄化葉巻病を媒介し、ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介するため、注意が必要です。

#### ○なし 黒星病

・一次伝染時期となるりん片脱落期から開花期は最重要防除期です。果そう基部病斑（芽基部病斑）の摘み取りを徹底し、2分咲きから落花直後に治療効果のあるDMI剤を散布しましょう。

○農薬は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使いましょう！

○短期暴露評価の導入に伴う農薬の使用方法の変更に注意しましょう！

○同一系統の薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

○花粉媒介昆虫（ミツバチ、マルハナバチ）や天敵に対する影響日数を目安に薬剤を選択しましょう。

#### 1か月気象予報（予報期間3月10日から4月9日 3月8日気象庁発表）

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率70%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
○気温	10%	20%	70%
○降水量	30%	40%	30%
○日照時間	30%	40%	30%

詳しくは農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

---

# 平成30年度 病害虫発生予報 第1号

平成30(2018)年4月20日  
栃木県農業環境指導センター

---

## ○天候の変化に注意し、野菜類病害虫の発生増加を防ぎましょう！

---

予想期間 4月下旬～5月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

---

### 1 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
  - (2) 根拠
    - ・現在の発生量は平年並(平年比79.5%：ほ場率、平年比58.0%:株率)。(±)
    - ・向こう1か月の気温は高く、日照時間は平年並の見込み。(±～+)
  - (3) 対策
    - ・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
    - ・化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しない気門封鎖剤を活用する。
    - ・気門封鎖剤は卵に効果が低いため、5日程度の間隔をおき、複数回散布する。
    - ・また、葉・果実の傷みを防ぐため、乾きにくい雨天日等の散布を避ける。
  - (4) 備考
    - ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。
- 

### 2 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
  - (2) 根拠
    - ・現在の発生量は平年並(平年比106.4%：ほ場率、平年比122.0%:花率)。(±)
    - ・向こう1か月の気温は高く、日照時間は平年並の見込み。(±～+)
  - (3) 対策
    - ・ハウス内の雑草はアザミウマ類の増殖源になるので除草する。
    - ・花を観察して、その1割以上でアザミウマ類が見られた時は、被害が大きくなる恐れがあるため、スピノエース顆粒水和剤かディアナSCを散布する。
  - (4) 備考
    - ・スピノエース顆粒水和剤やディアナSCは、天敵やミツバチへの影響があるので注意する。
    - ・[H29年度植物防疫ニュース\(速報No.13\)](#)、[病害虫防除対策のポイント\(No. 19\)](#)を当センターHPに掲載中。
- 

### 3 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
  - (2) 根拠
    - ・現在の発生量は平年並(平年比78.4%：ほ場率、平年比54.5%:株率)。(±)
    - ・向こう1か月の降水量及び日照時間は平年並の見込み。(±)
    - ・当センターの予察調査において、一部ほ場で茎での発病が認められる。(＋)
  - (3) 対策
    - ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。
    - ・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。
    - ・予防を基本とし、フルピカフロアブル等を散布する。発生が見られたら、ピクシオDF等を散布する。
  - (4) 備考
    - ・[薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。
- 

### 4 たまねぎ ベと病

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
  - (2) 根拠
    - ・現在の発生量はやや多い(ほ場率62.5%、株率1.3%)。(＋)
    - ・向こう1か月の降水量及び日照時間は平年並の見込み。(±)
  - (3) 対策
    - ・排水対策を行う。
    - ・ジマンダイセン水和剤、ザンプロDMフロアブル等を散布する。
    - ・曇雨天が続くと予想される場合は降雨前に薬剤を散布する。
  - (4) 備考
    - ・気温15℃くらいで雨が多いと発生が多くなる。
-

## 5 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比108.2%：ほ場率、平年比72.9%：株率)。(±)  
・向こう1か月の気温は高く日照時間は平年並の見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・薬剤がかかりやすい生育初期からの防除を行う。  
・葉裏をよく観察し、発生が認められたら下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に気門封鎖剤やマイトコネフロアブル(ナミハダニ)等を散布する。
- (4) 備 考 ・薬剤感受性検定結果を当センターHPに掲載中。

## 6 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
いちご	灰色かび病	少	少	トマト	コナジラミ類	平年並	平年並
	うどんこ病	少	少	きゅうり	べと病	やや少	やや少
	アブラムシ類	やや多	多		うどんこ病	やや多	やや多
トマト	葉かび病	やや少	やや少		アザミウマ類	少	やや少

### 春の病害虫防除対策

#### ○麦類 赤かび病

・出穂や開花状況をよく観察して、適期に赤かび病防除を行いましょ。

[植物防疫ニュース\(速報No.1\)](#)を当センターHPに掲載中。

#### ○いちご親株床

・いちごの収穫作業や水稲作業等が重なる繁忙期ですが、親株床での病害虫発生にも注意しましょ。また、本ぼと親株床の管理作業を分け、本ぼからの病害虫の持ち込みを避けましょ。

#### ○トマト コナジラミ類、キュウリ アザミウマ類

・気温の上昇に伴い、施設内で越冬したコナジラミ類やアザミウマ類が急増するおそれがあります。コナジラミ類やアザミウマ類を野外に出さないよう、防除を徹底しましょ。特に、タバココナジラミはトマト黄化葉巻病を媒介し、ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介するため、注意が必要です。また、施設栽培では、栽培終了時にすべての株を地際から切断した上で蒸し込み処理を行い、寄生している害虫を完全に死滅させ、外部への拡散を防ぎましょ。

#### ○なし 黒星病

・一次伝染時期となるりん片脱落期から開花期は最重要防除時期です。果そう基部病斑(芽基部病斑)の摘み取りを徹底し、2分咲きから落花直後に治療効果があるDMI剤を散布しましょ。また、開花期から展葉初期に降雨が多く、開花から2週間以内に黒星病の発生が散見される場合は、多発の危険がありますので注意しましょ。

○農薬は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使いましょ！

○同一系統の薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょ。

○花粉媒介昆虫(ミツバチ、マルハナバチ)や天敵に対する影響日数を目安に薬剤を選択しましょ。

#### 1か月気象予報(予報期間4月21日から5月20日 4月19日気象庁発表)

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い(少ない) 確率	平年並の確率	高い(多い) 確率
○気 温	10%	20%	70%
○降水量	30%	40%	30%
○日照時間	30%	40%	30%

詳しくは農業環境指導センター(TEL 028-626-3086)までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ(<http://www.jpnn.ne.jp/tochigi/index.html>)でもご覧になれます。

# 平成30(2018)年度 病虫害発生予報 第2号

平成30(2018)年5月17日  
栃木県農業環境指導センター

## ○気温の上昇に伴う各種害虫の発生に注意しましょう！

予想期間 5月下旬～6月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

### 1 水稲 縞葉枯病(ヒメトビウンカ媒介)

- (1) 発生予想 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠
  - ・ 昨年10月の再生稲調査での発生量は平年並(平年比100.0%:株率)。(±)
  - ・ 昨年11月のウンカ類の越冬前幼虫の発生量はやや少なかった(-)。ウイルスの保毒虫率は、県平均が5.5%で、10%を超える地点が数地点確認された。(+)。
  - ・ 向こう1か月の気温は高い見込み。(+)。
- (3) 対策
  - ・ 発生が多い地域では、地域ぐるみで本田期防除を実施する。
- (4) 備考
  - ・ [平成29\(2017\)年度植物防疫ニュース\(速報No.12\)](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

### 2 いちご(親株) ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠
  - ・ 4月調査での発生量は平年並(平年比79.5%:ほ場率、平年比58.0%:株率)。(±)
  - ・ 向こう1か月の気温は高い見込み。(+)。
- (3) 対策
  - ・ 本ほで薬剤抵抗性を発達させたハダニ類を親株に持ち込まないために、本ほ作業後に親株の管理作業を行わない。
  - ・ 雑草はハダニ類の発生源となるため、除草を徹底する。
  - ・ 気門封鎖剤やチリカブリダニ製剤[野菜類(施設栽培)]を活用し、有効薬剤を温存する。なお、一部の殺虫・殺菌剤は天敵に悪影響があるため注意する。
  - ・ 気門封鎖剤は卵に効果が低いため、5日程度の間隔をおき、複数回散布する。また、殺卵効果のある薬剤と組み合わせてもよい。
- (4) 備考
  - ・ 天敵放飼から1～2週間は薬剤散布を避け、使用する薬剤は天敵に影響のないものを選択する。
  - ・ [薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

### 3 果樹 果樹カメムシ類

- (1) 発生予想 発生量： **多い**
- (2) 根拠
  - ・ 現在のフェロモントラップへの誘殺数はやや多い。(+)。
  - ・ 向こう1か月の気温は高い見込み。(+)。
- (3) 対策
  - ・ 夜温が下がらない蒸し暑い日の日没時に飛来が多い。こまめに園内を観察し、飛来が認められたら防除する。
- (4) 備考
  - ・ 未発生園での過度な防除はハダニ類やカイガラムシ類等の天敵相を破壊し、他の害虫種の多発に繋がるため注意する。
  - ・ 山林に隣接したり、過去に被害が大きかった果樹園では特に注意する。

### 4 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠
  - ・ 現在の発生量は平年並(平年比86.4%:ほ場率、平年比34.6%:株率)。(±)
  - ・ 向こう1か月の気温は高い見込み。(+)。
- (3) 対策
  - ・ 薬剤がかかりやすい生育初期からの防除を行う。
  - ・ 葉裏をよく観察し、発生が認められたら下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に薬剤を散布する。
  - ・ 化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しない気門封鎖剤を活用する。
- (4) 備考
  - ・ [薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

## 5 きく アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は少ない(平年比0.0%：ほ場率、平年比0.0%：株率)。(一)  
・向こう1か月の気温は高い見込み。(十)
- (3) 対 策 ・雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、ほ場内外を除草する。  
・苗での持ち込みに注意する。  
・施設開口部に防虫ネットを張ることにより、アザミウマ類の侵入を防ぐ。  
・発生初期から、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。  
・アザミウマ類はウイルス病(キク茎えそ病、キクえそ病等)を媒介するので注意する。
- (4) 備 考 ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

## 6 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
水稲	イネミズゾウムシ	—	平年並	きゅうり	べと病	平年並	平年並
麦	赤かび病	少	少		うどんこ病	やや多	やや多
トマト	コナジラミ類	平年並	平年並	たまねぎ	べと病	平年並	平年並
				なし	黒星病	少	やや少

### ○麦類 赤かび病

- ・開花・出穂期での発生がない場合でも、天候(登熟期連続降雨など)によっては発生が見られることがあります。天候に注意し、必要に応じて追加防除を行いましょう。  
[植物防疫ニュース\(速報No. 1\)](#)を当センターHPに掲載中。

### ○施設栽培の病害虫

- ・トマト、きゅうり、いちご等の施設栽培では、施設内の害虫が野外へ飛散しないよう、栽培終了時にハウスの密閉蒸し込み等で防除しましょう。特に、コナジラミ類はトマト黄化葉巻病、トマト黄化病、キュウリ退緑黄化病を、ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介します。ウイルス保毒虫を次作に持ち込まないためにも、飛散を防止して伝染環を断つことが重要です。
- ・栽培末期の病害虫は、各種薬剤に抵抗性を発達させている可能性があります。葉かき後の葉や残渣には病害虫が付着しているので、そのままほ場内外に放置すると抵抗性を発達させた病害虫の拡散につながりますので、適切に処分しましょう。

### 1か月気象予報(予報期間5月19日から6月18日 5月17日気象庁発表)

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。期間の後半は、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並の確率50%です。

	低い(少ない) 確率	平年並の確率	高い(多い) 確率
○気 温	30%	30%	40%
○降水量	20%	40%	40%
○日照時間	40%	40%	20%

## NEWS & INFORMATION

- 「栃木県農薬管理指導士」養成研修(7月18、19日開催予定)、更新研修(7月18日開催予定)が開催されます。申込期間は6月4日(月)(予定)からとなりますので、特に更新対象者の方はお忘れなくお申込みください。詳しくは、県農政部経営技術課環境保全型農業担当までお問合せください。(TEL 028-623-2286)
- 県では、農薬による事故等の発生防止を図るため、6月から8月の3か月間を「農薬危害防止運動期間」とし、農薬の適正使用等について啓発活動を行います。
- 農薬は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使いましょう!

詳しくは農業環境指導センター(TEL 028-626-3086)までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部\(@tochigi\\_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>)でもご覧になれます。

---

## 平成30(2018)年度 病害虫発生予報 第3号

平成30(2018)年6月15日  
栃木県農業環境指導センター

---

### ○なしの黒星病とナシヒメシンクイの発生動向に注意しましょう。 ○いちごのうどんこ病、ハダニ類の防除は育苗期が重要です。

---

予想期間 6月下旬～7月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

---

#### 1 水稲 縞葉枯病(ヒメトビウンカ媒介)

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
  - (2) 根拠 ・ 5月中下旬の大まほ場におけるヒメトビウンカの生息密度はやや少。(－)  
・ 第1世代幼虫のウイルス保毒虫率は県中部10.2%、県南部6.3%と高い。(＋)
  - (3) 対策 ・ 発生が多い地域では、地域ぐるみで本田期防除を実施する。
  - (4) 備考 ・ [植物防疫ニュースNo.3](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。
- 

#### 2 いちご(育苗ほ) 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量：**やや少ない**
  - (2) 根拠 ・ 現在の発生量は少ない(平年比0%：ほ場率)。(－)  
・ 向こう1か月の気温は平年並から高く、日照時間は平年並または多く、降水量は平年並または少ない見込み。(±～－)
  - (3) 対策 ・ 水滴の飛散等で伝染するので、頭上かん水は避け、かん水チューブを用いるなどできるだけ水の跳ね返りのないかん水方法を行う。  
・ 発病してからの防除は困難なので、予防を主にベルコートフロアブル等を散布する。また、発病株は見つけ次第取り除き、ほ場外で処分し、速やかに治療効果のあるサンリット水和剤等を散布する。
  - (4) 備考 ・ [病害虫防除対策のポイント\(イチゴ炭疽病\)](#)、[薬剤感受性検定結果\(QoI剤\)](#)を当センターHPに掲載中。
- 

#### 3 いちご(育苗ほ) うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：**やや少ない**
  - (2) 根拠 ・ 現在の発生量はやや少ない(平年比36.0%：ほ場率)。(－)  
・ 向こう1か月の気温は平年並から高く、日照時間は平年並または多く、降水量は平年並または少ない見込み。(±～－)
  - (3) 対策 ・ 生育に応じて葉かきを実施し、株間の風通しを良くする。  
・ 軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な温度管理やかん水を行う。  
・ 予防を主体にベルコートフロアブル等を散布する。
  - (4) 備考 ・ 高温時には菌の活動が抑えられ病徴が見えにくくなるが、菌は残存しているため、注意する。
- 

#### 4 いちご(育苗ほ) ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
  - (2) 根拠 ・ 現在の発生量は平年並(平年比74.3%：ほ場率、50.4%：株率)。(±)  
・ 向こう1か月の気温は平年並から高く、日照時間は平年並または多い。(＋)
  - (3) 対策 ・ 雑草はハダニ類の発生源となるため、除草を徹底する。  
・ 気門封鎖剤等を活用し、有効薬剤を温存する。  
・ 気門封鎖剤は卵に効果が低いため、5日程度の間隔をおき、複数回散布する。また、殺卵効果のある薬剤と組み合わせてもよい。
  - (4) 備考 ・ カブリダニ類を放飼している場合は、一部の殺虫・殺菌剤は天敵に悪影響があるため注意する。  
・ [薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。
-

## 5 野菜類・花き類 アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 6月第2半旬までの青色粘着板への誘殺数は平年並。(±)  
 ・ きくにおける現在の発生量は平年並(平年比106.7%:株率)。(±)  
 ・ 向こう1か月の気温は平年並から高く、降水量は平年並または少ない見込み(±~+)
- (3) 対 策 ・ 雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、ほ場内外を除草する。  
 ・ 施設栽培では、開口部に防虫ネット等を張り、侵入を防ぐ。  
 ・ 発生初期から、マツチ乳剤<適用作物:トマト、きく [シシトマ] >やモベントフロアブル<適用作物:トマト、なす、きゅうり>等を散布する。
- (4) 備 考 ・ アザミウマ類はウイルス病を媒介するので注意する。  
 ・ モベントフロアブルは、マルハナバチや天敵への影響があるので注意する。  
 ・ [薬剤感受性検定結果\(続報\)](#)を当センターHPに掲載中。

## 6 なし 黒星病

- (1) 発生予想 発生量： **少ない**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は少ない(平年比9.0%:ほ場率、平年比0.0%:株率)。(一)  
 ・ 向こう1か月の気温は平年並から高く、日照時間は平年並または多く、降水量は平年並または少ない見込み。(±~+)
- (3) 対 策 ・ 発病した葉や果実は2次伝染源となるため、摘み取ってほ場外で処分する。  
 ・ 発生が多く見られるほ場では、ナリアWDG、フルーツセイバー等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [簡易薬剤感受性検定](#)を当センターHPに掲載中。

## 7 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
水稲	いもち病	—	やや少	野菜類	ハスモンヨトウ	平年並	やや多
トマト	アブラムシ類	やや多	やや多	なし	ナシヒメシンクイ	多	多
	コナジラミ類	やや少	平年並	ぶどう	べと病	少	少
なす	ハダニ類	やや多	やや多	きく	ハダニ類	平年並	やや多
	アブラムシ類	やや多	やや多				

### ○ほ場の雑草対策は害虫防除の基本です！

周辺の雑草だけではなく水田内の雑草(ノビエ、イヌホタルイ等)も、斑点米カメムシ類の誘引・発生源となります。また、野菜類や花き類でも、ほ場内外の雑草はハダニ類やアザミウマ類、アブラムシ類の温床となります。適切な雑草対策で害虫類の生息しにくい環境を作りましょう。

### 1か月気象予報(予報期間6月16日から7月15日 6月14日気象庁発表)

平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。向こう1か月平均気温は平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または高い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、低い確率ともに50%、2週目は、平年並または高い確率ともに40%、3~4週目は高い確率50%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
○気温	20%	40%	40%
○降水量	40%	40%	20%
○日照時間	20%	40%	40%

## NEWS & INFORMATION

- 「栃木県農薬管理指導士」養成研修(7月18・19日)、更新研修(7月18日)が開催されます。詳しくは農政部経営技術課環境保全型農業担当までお問合せください。(TEL 028-623-2286)
- 県では、農薬による事故等の発生防止を図るため、6月から8月の3か月間を「農薬危害防止運動期間」とし、農薬の適正使用等について啓発活動を行います。

詳しくは農業環境指導センター(TEL 028-626-3086)までお問合せください。  
 病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>)でもご覧になれます。

# 平成30(2018)年度 病虫害発生予報 第4号

平成30(2018)年7月20日  
栃木県農業環境指導センター

## ○高温による害虫の増加に注意しましょう！

予想期間 7月下旬～8月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

### 1 水稲 いもち病

- (1) 発生予想 発生量： **やや少ない**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(平年比104.8%：ほ場率、平年比108.9%：株率)。(±)  
向こう1か月の平均気温は高く、降水量は少ない。(－)
- (3) 対 策 ・ 発生が見られた場合には、早急にブラシフロアブル等の予防・治療効果のある薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・ [BLASTAMの情報](#)、[薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

### 2 水稲 斑点米カメムシ類

- (1) 発生予想 発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・ 7月中旬の雑草地におけるすくい取り調査での発生量は多い(平年比273.9%：成幼虫数)。(＋)  
・ 向こう1か月の平均気温は高く、降水量は少ない。(＋)
- (3) 対 策 ・ 穂ぞろい期に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、乳熟初期(出穂期7～10日後)までにMR. ジョーカーEW、スタークル液剤10、スタークルメイト液剤10等を散布する。  
・ 防除後も斑点米カメムシ類が見られる場合は、7～10日間隔で1～2回の追加散布を行う。
- (4) 備 考 ・ [植物防疫ニュースNo. 4\(水稲・斑点米カメムシ類\)](#)を当センターHPに掲載中。

### 3 大豆 吸実性カメムシ類

- (1) 発生予想 発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・ 7月第3半旬までのフェロモントラップへの誘殺数はやや多い。(＋)  
・ 向こう1か月の平均気温は高く、降水量は少ない。(＋)
- (3) 対 策 ・ 開花期の15日後から子実肥大後期(9月下旬)までにトレボン乳剤、スミチオン乳剤等を10～14日間隔で散布する。  
・ カメムシ類の発生が多い場合は、散布間隔を短く回数を多くする。

### 4 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量： **やや少ない**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生ほ場率は少ない。(－)  
向こう1か月の平均気温は高い。(＋)
- (3) 対 策 ・ 水滴の飛散等で伝染するので、頭上かん水は避け、できるだけ水の跳ね返りのないかん水を行う。  
・ 風通しを良くするとともに、夕方には地上部が乾いた状態になるようかん水の時間や量を調節する。  
・ 発病してからの防除は困難なので、予防を主にベルコートフロアブル、アントラコール顆粒水和剤等をローテーション散布する。  
・ 発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分し、速やかにサンリット水和剤またはゲッター水和剤等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [病虫害防除対策のポイント\(イチゴ炭疽病\)](#)、[薬剤感受性検定結果\(QoI剤\)](#)を当センターHPに掲載中。

## 5 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：少ない  
(2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比42.5%：ほ場率)。(－)  
・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は少ない。(－)  
(3) 対 策 ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な肥培管理やかん水を行う。  
・予防を主体にベルコートフロアブル、アフエットフロアブル等を散布する。  
(4) 備 考 ・高温期には菌の活動が抑えられ病徴が見えにくくなるが、菌は残存しているので注意する。

## 6 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い  
(2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比81.2%：ほ場率)。(±)  
・向こう1か月の平均気温は高い。(＋)  
(3) 対 策 ・雑草はハダニ類の発生源となるため、除草を徹底する。  
・苗による本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗での防除を徹底する。  
・育苗期は気門封鎖剤を活用し、本ぼ定植後に使用可能な有効薬剤を温存する。  
(4) 備 考 ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

## 7 なし シンクイムシ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い  
(2) 根 拠 ・7月第3半旬までのフェロモントラップへの誘殺数はやや多い。(＋)  
・向こう1か月の降水量は少ない。(＋)  
(3) 対 策 ・幼虫に対する防除適期は、成虫発生のピーク到達直後である。  
・園内をよく観察し、果実や新梢に食害が見られた場合、速やかに摘果・せん除し、園外で適切に処分する。  
・発生・食害状況を確認し、必要に応じてノーモルト乳剤、サムコルフロアブル10等で適宜防除を行う。  
(4) 備 考 ・[ナシヒメシンクイの誘殺数グラフ](#)を当センターHPに掲載中。

## 8 その他の病害虫

	現 況	発生予想		現 況	発生予想
水 稲 縞葉枯病	平年並	やや多	ね ぎ さび病	平年並	平年並
トマト コナジラミ類	やや多	多	な し 黒星病	少	少
な す アザミウマ類	平年並	やや多	き く ハダニ類	平年並	やや多

★農薬は適正に管理し、正しく使いましょう！

★同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

### 1か月気象予報（予報期間7月21日から8月20日 7月19日気象庁発表）

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
○気 温	10%	20%	70%
○降水量	40%	30%	30%
○日照時間	20%	40%	40%

## NEWS & INFORMATION

○県では、農薬による事故等の発生防止を図るため、6月から8月の3か月間を「農薬危害防止運動期間」とし、農薬の適正使用等について啓発活動を行います。

詳しくは農業環境指導センター(Tel 028-626-3086)までお問い合わせください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。

---

## 平成30(2018)年度 病害虫発生予報 第5号

平成30(2018)年8月23日  
栃木県農業環境指導センター

---

### ○高温による害虫の発生に注意しましょう！

---

予想期間 8月下旬～9月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

---

#### 1 大豆 ベと病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
  - (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比60.0%：ほ場率、平年比56.6%：株率)。(±)  
・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並の見込み。(－)  
・品種「里のほほえみ」はべと病に罹病しやすい。(＋)
  - (3) 対 策 ・開花期から子実肥大期にランマンフロアブル、ベトファイター顆粒水和剤等を散布する。
  - (4) 備 考 ・[植物防疫ニュースNo.5](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。
- 

#### 2 大豆 吸実性カメムシ類

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
  - (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い(平年比128.7%：ほ場率、平年比200.0%：株率)。(＋)  
・向こう1か月の平均気温は高い見込み。(＋)
  - (3) 対 策 ・開花期の15日後から、トレボン乳剤、スミチオン乳剤等を10～14日間隔で散布する。なお、子実肥大中期(9月上中旬)の吸汁害は、減収および品質低下が大きいため9月も防除を行う。
- 

#### 3 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量：**やや少ない**
  - (2) 根 拠 ・現在の発生ほ場率は少ない。(－)  
・向こう1か月の平均気温は高い見込み。(＋)
  - (3) 対 策 ・水滴の飛散等で伝染するので、頭上かん水は避け、できるだけ水の跳ね返りのないかん水を行う。  
・風通しを良くするとともに、茎葉のぬれ時間が長くないよう、かん水はできるだけ晴天日の午前中に行い、曇雨天日や夕方のかん水を控える。  
・発病してからの防除は困難なので、予防を主体にアントラコール顆粒水和剤等を散布する。  
・発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分し、速やかにサンリット水和剤等を散布する。
  - (4) 備 考 ・[植物防疫ニュースNo.7](#)、[薬剤感受性検定結果\(QoI剤\)](#)を当センターHPに掲載中。
- 

#### 4 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
  - (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比72.7%：ほ場率、平年比43.4%：発生株率)。(±)  
・向こう1か月の平均気温は高い見込み。(＋)
  - (3) 対 策 ・雑草はハダニ類の発生源となるため、除草を徹底する。  
・苗による本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗での防除を適正に行う。  
・育苗中は気門封鎖剤等を活用し、本ぼ定植後に使用可能な有効薬剤を温存する。
  - (4) 備 考 ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。
-

## 5 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（平年比105.4%：ほ場率、平年比70.5%：発生株率）。  
（±）  
・ 向こう1か月の平均気温は高い見込み。（+）
- (3) 対 策 ・ 薬剤がかかりやすい生育初期からの防除を行う。  
・ 葉裏をよく観察し、発生が認められたら下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧  
・ に気門封鎖剤やスターマイトフロアブル等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

## 6 大豆・野菜類（いちご・なす等）・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・ 8月第2半旬までのフェロモントラップによる誘殺数は多い。（+）  
・ 向こう1か月の平均気温は高い見込み。（+）
- (3) 対 策 ・ 定期的にはほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。  
・ ハスモンヨトウの幼虫は、齢期が進むと被害が大きくなる上に、薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

## 7 野菜類・花き類・大豆 タバコガ類

- (1) 発生予想 発生量： **平年並**
- (2) 根 拠 ・ 8月第2半旬までのフェロモントラップによる誘殺数はやや少ない。（-）  
・ 向こう1か月の平均気温は高い見込み。（+）
- (3) 対 策 ・ 植物組織内部に食入すると薬剤防除が困難になるため、発生初期に防除する。  
・ 施設栽培では、開口部に防虫ネット等を張り、侵入を防ぐ。  
・ 被害果実にはほ場外に持ち出して適切に処分する。  
・ 果実や花、頂芽などに寄生するため、防除が遅れると被害が大きくなる。寄生されやすい部位をこまめに観察する。

## 8 その他の病害虫

	現 況	発生予想		現 況	発生予想		
水 稲	穂いもち	やや少	少	な す	うどんこ病	平年並	平年並
	紋枯病	平年並	平年並	ね ぎ	黒斑病	やや多	やや多
いちご	うどんこ病	少	少		アザミウマ類	平年並	平年並

### ☆いちご本ほへの病害虫持ち込みに注意しましょう！

・ 病害虫を本ほに持ち込まないよう十分に注意し、健全株を定植しましょう。

### ☆農薬は適正に管理し、正しく使いましょう！

☆同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

### 1か月気象予報（予報期間8月25日から9月24日 8月23日気象庁発表）

期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。 天気は数日の周期で変わるでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
○気 温	20%	30%	50%
○降水量	30%	40%	30%
○日照時間	30%	40%	30%

詳しくは農業環境指導センター(Tel 028-626-3086)までお問い合わせください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。

---

# 平成30（2018）年度 病害虫発生予報 第6号

平成30（2018）年 9月21日  
栃木県農業環境指導センター

---

## 〇いちごの病害虫発生に注意しましょう！

---

予想期間 9月下旬～10月下旬

予報の根拠で、（+）は増加要因、（-）は減少要因を表す。

---

### 1 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生はやや少ない（平年比34.9%：ほ場率）。（-）  
・向こう1か月の平均気温は平年並または高く、降水量は平年並または多い見込み。（+）
- (3) 対 策 ・発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。  
・水滴の飛散等によって伝染するので、できるだけ水の跳ね返りのないかん水を行う。また、かん水はできるだけ晴天日の午前中に行い、曇雨天日や夕方のかん水を控える。  
・症状が出てからの防除は困難なので、予防を主体にセイビーフロアブル20等を散布する。
- (4) 備 考 ・[植物防疫ニュースNo. 7](#)、[薬剤感受性検定結果（QoI剤）](#)を当センターHPに掲載中。
- 

### 2 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：**やや少ない**
- (2) 根 拠 ・現在の発生は少ない。（-）  
・向こう1か月の平均気温は平年並または高く、降水量は平年並または多い見込み。（+）
- (3) 対 策 ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な温度管理やかん水を行う。  
・現在発生が見られなくても、今後発生する可能性があるため、保温開始前からフルピカフロアブル等を散布する。  
・発生が見られたらガッテン乳剤等を散布する。
- 

### 3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや少ない**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は少ない。（-）  
・向こう1か月の平均気温は平年並または高い見込み。（+）
- (3) 対 策 ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。  
・化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しない気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。  
・カブリダニ類（天敵）導入時はハダニ類が多いと失敗しやすいので、気門封鎖剤などを定期的に散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。  
・気門封鎖剤は卵に効果がないため、5日程度の間隔をおき、複数回散布する。  
・葉の傷みを防ぐため、高温時や乾きにくい雨天日の散布を避ける。  
・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。
- 

### 4 野菜類（いちご・なす等）・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・9月第1半旬までのフェロモントラップによる誘殺数はやや多い。（+）  
・向こう1か月の平均気温は平年並または高い見込み。（+）
- (3) 対 策 ・定期的にはほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。  
・幼虫の齢期が進むと被害が大きくなる上に、薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。
-

## 5 野菜類・花き類 タバコガ類

(1) 発生予想 発生量：多い

(2) 根 拠 ・ 9月第1半旬までのフェロモントラップによるオオタバコガの誘殺数は多い。  
(+)

・ 向こう1か月の平均気温は平年並または高い見込み。(+)

(3) 対 策 ・ 植物組織内部に食入すると薬剤防除が困難になるため、発生初期に防除する。

・ 施設栽培では、開口部に防虫ネット等を張り、侵入を防ぐ。

・ 被害果実はほ場外に持ち出して適切に処分する。

・ 果実や花、頂芽などに寄生するため、防除が遅れると被害が大きくなる。寄生されやすい部位をこまめに観察する。

## 6 その他の病害虫

	現 況	発生予想		現 況	発生予想		
きゅうり	べと病	平年並	やや多	きく	ハダニ類	平年並	やや多
	うどんこ病	やや多	やや多		アザミウマ類	平年並	やや多
ねぎ	黒斑病	平年並	やや多				

### 秋の病害虫防除対策

#### ★イネ縞葉枯病

・ 縞葉枯病が発生したほ場の再生稲（ひこばえ）は、媒介虫のヒメトビウンカの増殖源と縞葉枯ウイルスの獲得源になります。現在、ヒメトビウンカ成虫が平年より多く発生しているため、早急に丁寧な耕起を行いましょ。

#### ★麦類種子伝染性病害

・ 近年、オオムギ斑葉病等の種子伝染性病害が増加しています。種子消毒を適切に行いましょう。

#### ★トマト黄化葉巻病（TYLCV）

・ TYLCVはタバココナジラミによって媒介されます。媒介虫や感染源となる罹病植物を施設内に「入れない」対策を徹底しましょう。

#### ★いちごのアザミウマ類

・ 頂花房の開花が10月上旬以前から見られる施設では、秋期からアザミウマ類が発生しやすく、翌年の発生も早まる傾向があるため、適切に防除しましょう。

#### ★ナシ黒星病（秋季防除）

・ 病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となるため、収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行い、園内外の落葉を集めて適切に処分しましょう。防除の際は周辺へ飛散（ドリフト）しないよう十分注意しましょう。

#### ★農薬は適正に管理し、正しく使いましょう！

★同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

### 1か月気象予報（予報期間9月22日から10月21日 9月20日気象庁発表）

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並の確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
○気温	20%	40%	40%
○降水量	20%	40%	40%
○日照時間	40%	40%	20%

### NEWS & INFORMATION

☆「栃木県農薬管理指導士」養成研修（11月7～8日）・更新研修（11月7日）が開催されます。申込期間が9月10日～10月12日となりますので、特に更新対象者の方はお忘れなく申込みください。詳しくはJA全農栃木県本部肥料農薬課までお問い合わせください。TEL(028)616-8840

詳しくは農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jpnn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

# 平成30年度 病害虫発生予報 第7号

平成30年10月19日  
栃木県農業環境指導センター

## ○施設栽培は予防・初期防除が重要です！保温開始前に防除を徹底しましょう！

予想期間 10月下旬～11月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

### 1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：少ない
- (2) 根拠 ・現在の発生量は少ない(平年比13.8%：ほ場率、平年比3.7%：発生株率)。  
(-)  
・向こう1か月の降水量は少ない～平年並、日照時間は平年並～多い見込み。  
(-)
- (3) 対策 ・特に日照不足等で、株の軟弱徒長や樹勢低下が見られるほ場では発生しやすくなるので、適正な温度管理やかん水を行うなど、ほ場の管理に留意する。  
・現在発生が見られなくても、今後発生する可能性があるため、ベルコートフロアブル等を散布する。  
・ほ場を良く観察し、初発を見逃さない。発生が見られたら、シグナムWDG等を散布する。

### 2 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠 ・現在の発生量は平年並(平年比75.9%：ほ場率、平年比46.2%：発生花率)。(±)  
・向こう1か月の平均気温は平年並～高い(±～+)、降水量は少ない～平年並(±～+)。
- (3) 対策 ・雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、施設内の除草を行う。  
・低密度のうちにマツチ乳剤[ミカキイアザミマ]等のIGR剤を散布する。  
・花を観察して、1割以上でアザミウマ類が見られた時は、被害が大きくなる恐れがあるため、ディアナSC等を散布する。
- (4) 備考 ・10月中旬までに開花が進んでいるほ場では、秋期のアザミウマ類の発生が多い傾向にあるので、注意する。  
・[防除のポイントNo.19](#)、[薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

### 3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠 ・現在の発生量は少ない(平年比11.1%：ほ場率、平年比3.8%：発生株率)。(一)
- (3) 対策 ・向こう1か月の平均気温は平年並～高いの見込み。(±～+)  
・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。  
・化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しない気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。  
・カブリダニ類(天敵)導入時はハダニ類が多いと失敗しやすいので、気門封鎖剤などを定期的に散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。  
・気門封鎖剤は卵に効果が低いため、5日程度の間隔をおき、複数回散布する。  
・葉の傷みを防ぐため、高温時や乾きにくい雨天日の散布を避ける。  
・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
- (4) 備考 ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

### 4 イチゴ ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比7.9%：ほ場率、平年比0.3%：発生株率)。  
(-)  
・10月第1半旬までのフェロモントラップによる誘殺数はやや多い。(+)
- (3) 対策 ・向こう1か月の平均気温は平年並～高い見込み。(±～+)  
・定期的にはほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。  
・ハスモンヨトウの幼虫は、齢期が進むと被害が大きくなる上に、薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

## 5 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 発生量：少ない
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は少ない（平年比0%：ほ場率、平年比0%：発生株率）。（－）  
 ・向こう1か月の日照時間は平年並～多い（－～±）、降水量は平年並～少ない（－～±）。
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。  
 ・肥料切れ等により生育が衰えると発生しやすいので、肥培管理に注意する。  
 ・発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。  
 ・予防を主体にベルコートフロアブルやアフエットフロアブル等を散布する。  
 ・発生が見られたらトリフミン乳剤やファンタジスタ顆粒水和剤等を散布する。
- (4) 備 考 ・抵抗性品種に発病するレースが確認されているため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも、発生に注意する。

## 6 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並（平年比122%：ほ場率、平年比131%：発生株率）。（±）  
 ・向こう1か月の平均気温は平年並～高いの見込み。（±～＋）
- (3) 対 策 ・薬剤がかかりやすい生育初期からの防除を行う。  
 ・葉裏をよく観察し、発生が認められたら下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に気門封鎖剤やダブルフェースフロアブル等を散布する。
- (4) 備 考 ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

## 7 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
いちご	アブラムシ類	やや少	平年並	きゅうり	うどんこ病	平年並	やや少
	炭疽病	平年並	平年並			べと病	平年並
トマト	灰色かび病	少	少	にら	白斑葉枯病	やや少	少
	黄化葉巻病	平年並	平年並	きく	アザミウマ類	少	やや少

### 秋の病害虫防除対策

#### ○水稲の縞葉枯病、黄萎病

・両病害が発生したほ場の再生稲（ひこばえ）は媒介虫の増殖源及び、ウイルスやファイトプラズマの伝染源となります。早期の丁寧な耕起により次年産の本病拡大を防ぎましょう。

#### ○麦類種子伝染性病害

・近年、オオムギ斑葉病等の種子伝染性病害が増加しています。種子消毒を適切に行いましょう。  
[植物防疫ニュースNo. 8](#)を当センターHPに掲載中。

#### ○トマト黄化葉巻病（TYLCV）

・TYLCVはタバココナジラミによって媒介されます。媒介虫や感染源となる罹病植物を施設内に「入れない」対策の徹底が重要です。また、定植後は、黄色粘着板を設置して媒介虫の捕殺と発生状況を把握し、発生初期の防除に努めましょう。罹病株は見つけ次第抜き取り、抜き取った株は放置せず、速やかにビニール袋などで密閉し、枯死させてから処分しましょう。

#### ○ナシ黒星病（秋季防除）

・病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となるため、収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行い、園内外の落葉を集めて適切に処分しましょう。防除の際は周辺へ飛散（ドリフト）しないよう十分注意しましょう。

☆農薬は適正に管理し、正しく使いましょう！

☆同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

### 1か月気象予報（予報期間10月19日から11月20日 10月18日気象庁発表）

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
○気温	20%	40%	40%
○降水量	40%	40%	20%
○日照時間	20%	40%	40%

詳しくは農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せください。  
 病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ <http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html> でもご覧になれます。

## 平成30年度 病害虫発生予報 第8号

平成30(2018)年11月16日  
栃木県農業環境指導センター

### ○予防・発生初期防除を心がけ、病害虫を収穫盛期に持ち越さないようにしましょう！

予想期間 11月下旬～12月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

#### 1 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根拠 ・現在の発生量はやや多い(平年比130.4%：ほ場率 平年比457.1%：発生株率)。(+)  
・向こう1か月の平均気温は高い見込み。(+)
- (3) 対策 ・ハウス内の雑草はアザミウマ類の増殖源になるので除草する。  
・ミツバチや天敵を導入している時期なので、発生が見られる場合はマッチ乳剤[ミカキアザミウマ]等のIGR剤を散布する。  
・花を観察して、その1割以上でアザミウマ類が見られた時は、被害が大きくなる恐れがあるため、スピノエース顆粒水和剤かディアナSCを散布する。
- (4) 備考 ・秋期にアザミウマ類の発生が多かった施設では、注意が必要である。  
・スピノエース顆粒水和剤やディアナSCは、天敵やミツバチへの影響があるので注意する。  
・[病害虫防除対策のポイントNo.19いちごのアザミウマ類](#)、[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

#### 2 いちご アブラムシ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根拠 ・現在の発生量は平年並み(平年比70.3%：ほ場率 平年比100.0%：発生株率)。(±)  
・向こう1か月の平均気温は高い見込み。(+)
- (3) 対策 ・天敵放飼前に発生が見られた場合は、モスピラン顆粒水溶剤等を散布する。天敵放飼後に発生が見られた場合には、ウララDF等を散布する。
- (4) 備考 ・天敵の放飼を行っている場合は薬剤選定に注意する。

#### 3 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：**少ない**
- (2) 根拠 ・現在の発生量は少ない。(－)  
・向こう1か月の降水量は平年並、日照時間は平年並の見込み。(±)
- (3) 対策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。  
・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。  
・予防を主体にセイビアーフロアブル20等を葉裏にもよくかかるよう散布する。  
・発生が見られたらポリオキシシンAL水溶剤等を散布する。
- (4) 備考 ・微生物防除剤(ボトキラー水和剤等)は発病前～発病初期に使用する。また、低温条件では効果が出にくいので、施設内温度は10℃以上を確保する。  
・[薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

#### 4 トマト すすかび病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並み**
- (2) 根拠 ・現在の発生量は平年並み(平年比132.9%：ほ場率 平年比41.2%：発生株率)。

(±)

向こう1か月の降水量は平年並、日照時間は平年並の見込み。(±)

- (3) 対策
- ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。
  - ・発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
  - ・発生初期にネクスターフロアブル等を葉裏によくかかるように散布する。

## 5 きゅうり べと病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠
- ・現在の発生量は多い(平年比166.3%：ほ場率 平年比142.3%：株率)。(+)
    - ・向こう1か月の降水量は平年並、日照時間は平年並の見込み。(±)
- (3) 対策
- ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。
  - ・草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
  - ・予防を主体に銅剤やダコニール1000等を散布する。
- (4) 備考
- ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

## 6 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠
- ・現在の発生量はやや多い(平年比161.9%：ほ場率、平年比446.4%：発生株率)。(+)
    - ・向こう1か月の平均気温は高い見込み。(+)
- (3) 対策
- ・薬剤がかかりやすい生育初期からの防除を行う。
  - ・葉裏をよく観察し、発生が認められたら下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に気門封鎖剤等を散布する。
- (4) 備考
- ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

## 7 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
いちご	灰色かび病	少	少	トマト	コナジラミ類	平年並	やや多
	ハダニ類	やや少	平年並	きゅうり	うどんこ病	平年並	やや多
	コナジラミ類	やや少	平年並	きく	アザミウマ類	少	やや少
トマト	葉かび病	少	少				

### ○水稻の縞葉枯病(媒介虫：ヒメトビウンカ)、黄萎病(媒介虫：ツマグロヨコバイ)防除対策

・縞葉枯病や黄萎病が発病した再生稲(ひこばえ)は、次年産の伝染源となるので丁寧な耕起を行いましょう。

○農業は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使いましょう!

○同一系統の薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

○花粉媒介昆虫(ミツバチ、マルハナバチ)や天敵に対する影響日数を目安に薬剤を選択しましょう。

### 1か月気象予報(予報期間11月17日から12月16日 11月15日気象庁発表)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並みの確率40%です。日照時間は、平年並みの確率40%です。週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、高い確率60%です。3~4週目は、高い確率40%です。

	低い(少ない) 確率	平年並の確率	高い(多い) 確率
○気温	10%	30%	60%
○降水量	30%	40%	30%
○日照時間	30%	40%	30%

詳しくは農業環境指導センター(Tel 028-626-3086)までお問い合わせください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>)でもご覧になれます。

# 平成30(2018)年度 病害虫発生予報 第9号

平成30(2018)年12月21日  
栃木県農業環境指導センター

## ○施設内の栽培環境を適正に保ち、果菜類の病害虫発生を抑えましょう。

予想期間 12月下旬～1月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

### 1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：少ない
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は少ない(平年比0%：ほ場率)。(－)
- (3) 対 策 ・向こう1か月の降水量は平年並、日照時間は平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・下葉を除去し、風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
- (3) 対 策 ・発病した果実、果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
- (3) 対 策 ・発生初期に、ラミック顆粒水和剤等を散布する。
- (4) 備 考 ・[薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

### 2 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：少ない
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は少ない(平年比18.6%：ほ場率)。(－)
- (3) 対 策 ・向こう1か月の降水量は平年並、日照時間は平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・軟弱徒長すると発生しやすくなるので、適正な温度管理やかん水を行うなど、ほ場管理に留意する。
- (3) 対 策 ・発生を予防するため、硫黄粒剤でくん煙する。
- (3) 対 策 ・発生初期に、ラミック顆粒水和剤等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるため、天敵を導入した場合は長時間のくん煙処理は避ける。

### 3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比52.9%：ほ場率 平年比67.1%：発生株率)。(－)
- (3) 対 策 ・向こう1か月の平均気温は高い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
- (3) 対 策 ・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
- (3) 対 策 ・化学薬剤に対する抵抗性発達が著しいため、系統の異なる薬剤のローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しない気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
- (3) 対 策 ・カブリダニ類(天敵)放飼前は気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤などを用い、ハダニ類の防除を徹底する。
- (3) 対 策 ・気門封鎖剤は卵に効果が低いため、5日程度の間隔をおき、複数回散布する。また、葉などの傷みを防ぐため、乾きにくい雨天日等の散布を避ける。
- (4) 備 考 ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

### 4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比132.7%：ほ場率 平年比0%：発生株率)。(－)
- (3) 対 策 ・向こう1か月の降水量は平年並、日照時間は平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面に結露が生じないように管理する。
- (3) 対 策 ・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。

- ・ 予防を主体にフルピカフロアブル等を葉裏にもよくかかるよう散布する。
  - ・ 発生が見られたらピクシオDF等を散布する。
- (4) 備考
- ・ 微生物防除剤（ボトキラー水和剤等）は発病前～発病初期に使用する。また、低温条件では効果が出にくいので、施設内温度は10℃以上を確保する。
  - ・ [薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

## 5 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 発生量：少ない
- (2) 根 拠
- ・ 現在の発生量は少ない（平年比0%：ほ場率）。（－）
  - ・ 向こう1か月の降水量は平年並、日照時間は平年並の見込み。（±）
- (3) 対 策
- ・ 施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。
  - ・ 肥料切れ等により生育が衰えると発生しやすいので、肥培管理に注意する。
  - ・ 発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
  - ・ 予防を主体にダコニール1000等を葉裏によくかかるように散布する。
- (4) 備考
- ・ 抵抗性品種に発病するレースが確認されているため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも、発生に注意する。[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

## 6 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠
- ・ 現在の発生量はやや多い（平年比108.8%：ほ場率、平年比210.3%：発生株率）。（＋）
  - ・ 向こう1か月の平均気温は高い見込み。（＋）
- (3) 対 策
- ・ 薬剤がかかりやすい生育初期からの防除を行う。
  - ・ 葉裏をよく観察し、発生が認められたら下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に気門封鎖剤やスターマイトフロアブル等を散布する。
- (4) 備考
- ・ [薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

## 7 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
いちご	コナジラミ類	やや少	やや少	きゅうり	べと病	やや多	やや多
トマト	コナジラミ類	平年並	平年並	きく	アザミウマ類	少	少
きゅうり	うどんこ病	やや少	やや少				

**○イネ縞葉枯病（媒介虫：ヒメトビウンカ）のウイルス保毒虫率の高い地点が確認されています。**  
 ・平成30年11月に実施したヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の調査結果は、県平均が6.1%でした。県中南部では防除が必要とされる保毒虫率10%を超える地点が確認されています。詳細は当センターHPに掲載中の[植物防疫ニュースNo.9（水稲：イネ縞葉枯病）](#)を参照。

- 農業は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使いましょう！**
- 同一系統の薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。**
- 花粉媒介昆虫（ミツバチ、マルハナバチ）や天敵に対する影響日数を目安に薬剤を選択しましょう。**

### 1か月気象予報（予報期間12月22日から1月21日 12月20日気象庁発表）

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、低い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
○気 温	20%	30%	50%
○降水量	30%	40%	30%
○日照時間	30%	40%	30%

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問い合わせください。  
 病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

# いちご病害虫情報第8号(1月)

平成30年1月19日  
栃木県農業環境指導センター

## ○今月の病害虫発生状況○

- ・ **灰色かび病**の発生ほ場率が高くなっています。
- ・ **ハダニ類**の発生は平年並です。
- ・ **アザミウマ類**の発生は平年並です。

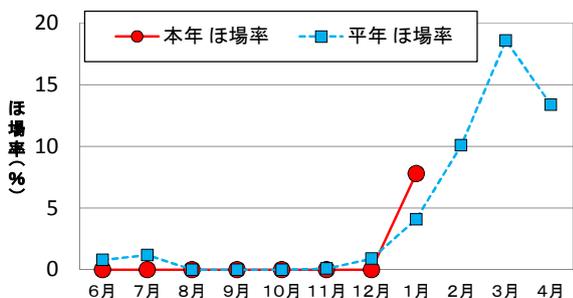


図1 灰色かび病発生ほ場率

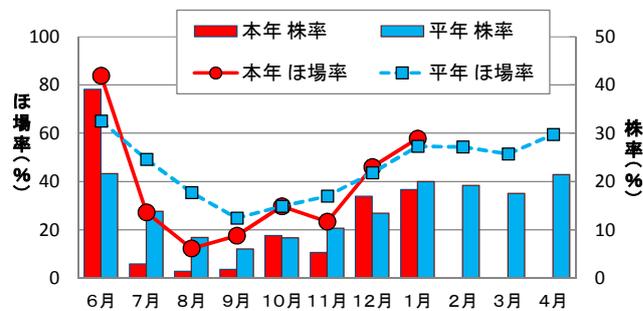


図2 ハダニ類発生ほ場率・株率

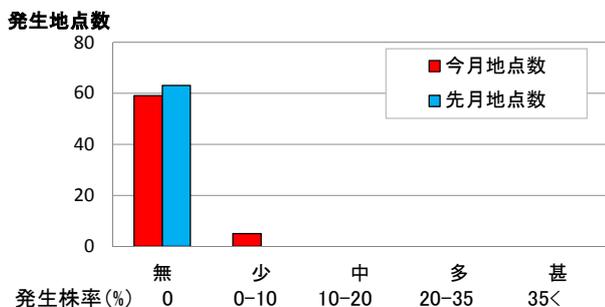


図3 灰色かび病発生程度別の地点数

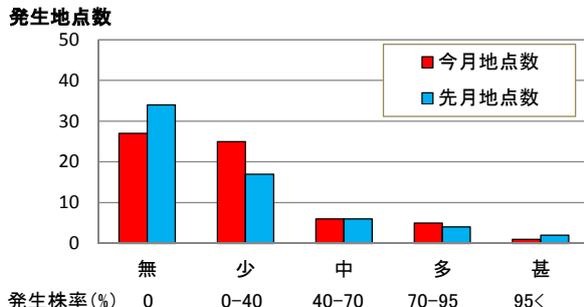


図4 ハダニ類発生程度別の地点数

## ○今月の技術情報（技術指導班）○（1月）

・11月以降、晴天日が多くなり、病害虫の発生は全体的に平年並～やや少ない傾向です。しかし、乾燥状態が続いていることから、引き続き、ハダニ類やアブラムシ類、アザミウマ類の発生に注意が必要です。

・2月以降は例年降水量が増加し、ハウス内の湿度が高くなり、病害が発生、拡大しやすい環境となります。下葉の除去等の管理作業、ハウス内の適正な温度管理や換気等により、病害の発生しにくい環境を作るよう努めましょう。

・今後1か月間は、1年間で最も気温が低くなる時期です。ハウスの隙間をなくし、保温効果を高めるとともに、授粉用ミツバチの活動も弱くなりやすい時期ですので、活動状況も確認しましょう。



写真1 灰色かび病



写真2 ナミハダニ

○今月の病害虫発生状況○

- ・ **うどんこ病**の発生はやや少ないです。
- ・ **灰色かび病**の発生ほ場率は平年並ですが、先月に比べ増加しています。
- ・ **ハダニ類** 及び**アブラムシ類** の発生は平年並です。
- ・ **アザミウマ類** の発生はやや少ないです。

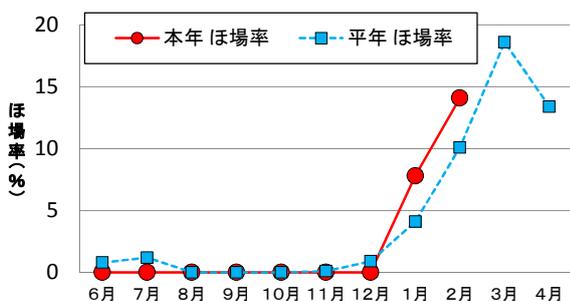


図1 灰色かび病発生ほ場率

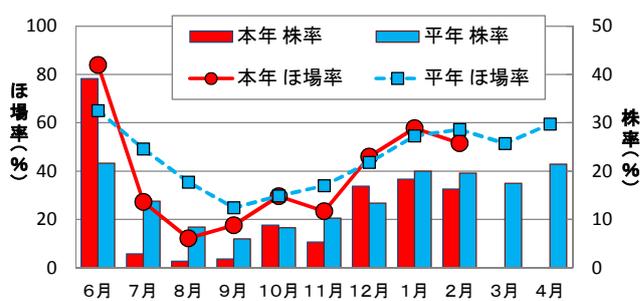


図2 ハダニ類発生ほ場率・株率

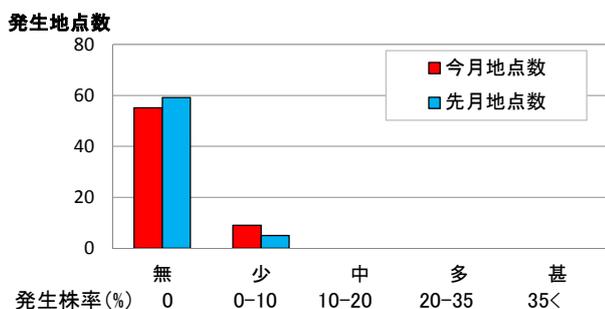


図3 灰色かび病発生程度別の地点数

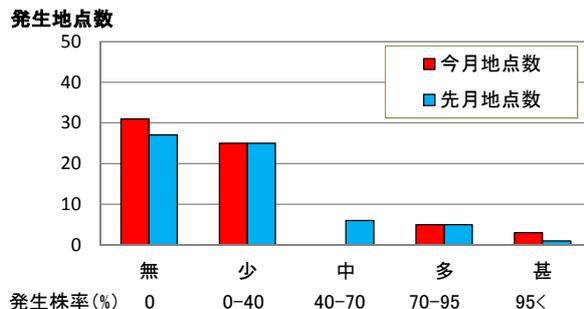


図4 ハダニ類発生程度別の地点数

○今月の技術情報 (技術指導班) ○ (2月)

- ・ 現在、ハダニ類の発生は平年並ですが、一部では多発ほ場も見られます。また、アザミウマ類の発生はやや少ないですが、今後、活動が活発になり、増加する時期を迎えますので、株及び花をよく観察し、早期発見を心がけ、適切な対処により被害の軽減に努めて下さい。
- ・ 病害については、平年並～やや少ない傾向ですが、降雪により、ハウスの湿度が高くなったことで灰色かび病が散見されます。
- ・ 向こう1か月の天候の見通しは、日照時間は平年並か少なく、降水量は平年並か多い見込みとなり、気温は引き続き低い予報が出ています。ハウス内の適正な温湿度管理により、病害の発生しにくい環境づくりに努めましょう。
- ・ これからの時期は、日射も強まるため、温度の上昇による果実の傷みなど、品質低下にも注意が必要です。換気方法を工夫するなど品質重視の管理に心がけましょう。



写真1 灰色かび病



写真2 花に寄生するヒラズハナアザミウマ

○今月の病害虫発生状況○

- ・ **うどんこ病**及び**灰色かび病**の発生はやや少ないです。
- ・ **ハダニ類** 及び**アブラムシ類** の発生は平年並です。
- ・ **アザミウマ類** の発生はやや少ないです。
- ・ **コナジラミ類** の発生は平年並です。

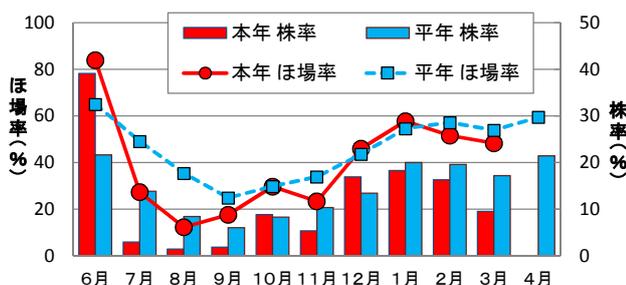


図1 ハダニ類発生ほ場率・株率

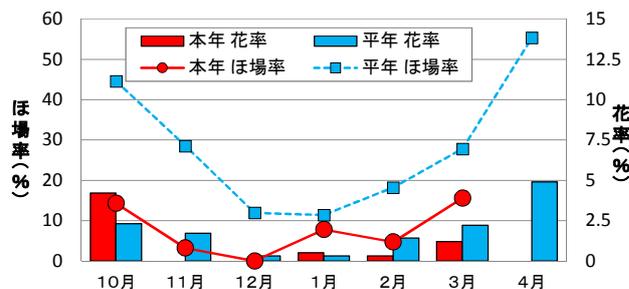


図3 アザミウマ類発生ほ場率・花率

※アザミウマ類の花調査の平年値は過去7年の値

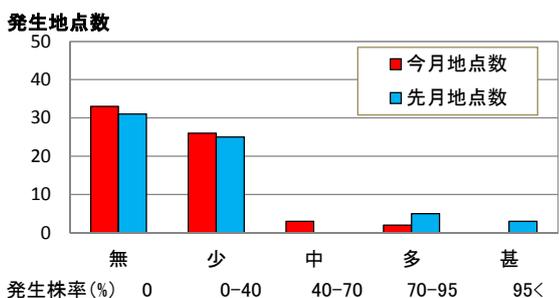


図2 ハダニ類発生程度別の地点数

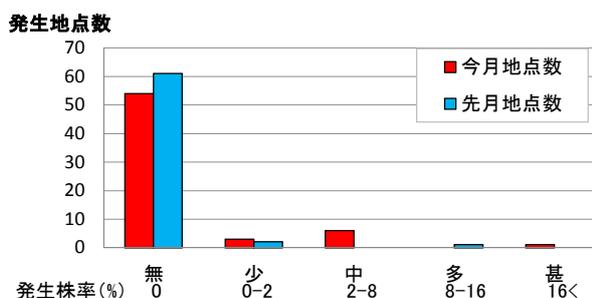


図4 アザミウマ類発生程度別の地点数

○今月の技術情報 (技術指導班) ○ (3月)

・ 周期的に天気や気温が変化していますが、病害虫の発生は平年並かやや少ない傾向です。

しかし、アザミウマ類の発生は、先月よりも増加しています。今後、気温の上昇に伴って、より活動が活発になり、発生が増加する時期を迎えますので、株及び花をよく観察し、早期発見と早めの防除に努めましょう。

・ 向こう1か月の天候の見通しは、南からの暖かい空気が流れ込みやすいため気温は高く、期間の前半はかなり高くなる予報がでています。温度の上昇による果実の傷みなど、品質低下にも注意が必要です。換気方法を工夫するなど品質重視の管理に心がけましょう。

・ 一方、平成31年産親株の定植時期になりますが、定植ほ場の準備を万全にし、親株への病害虫の発生がないかを良く確認して定植するとともに、計画的に作業を進めることができるよう日々の管理を再確認しながら取り組みましょう。



写真1 ナミハダニの被害葉



写真2 花に寄生するヒラズハナアザミウマ

○今月の病害虫発生状況○

- ・ うどんこ病及び灰色かび病の発生は少ないです。
- ・ アブラムシ類の発生はやや多いです。
- ・ ハダニ類、コナジラミ類及びアザミウマ類の発生は平年並です。

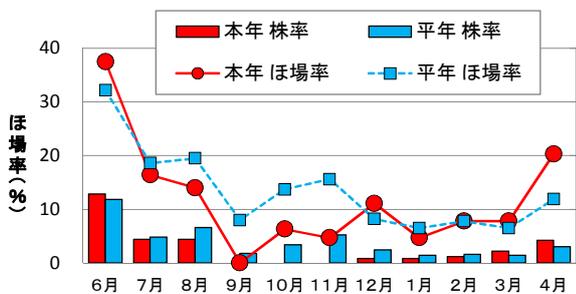


図1 アブラムシ類発生ほ場率・株率

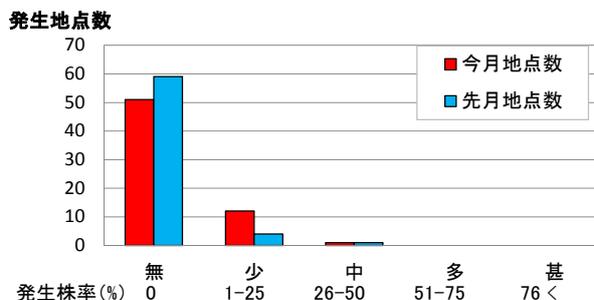


図2 アブラムシ類発生程度別の地点数

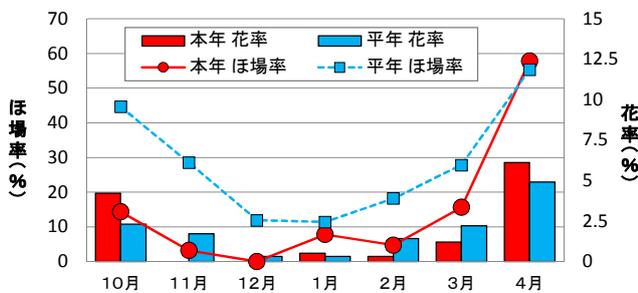


図3 アザミウマ類発生ほ場率・花率

※アザミウマ類の花調査の平年値は過去7年の値

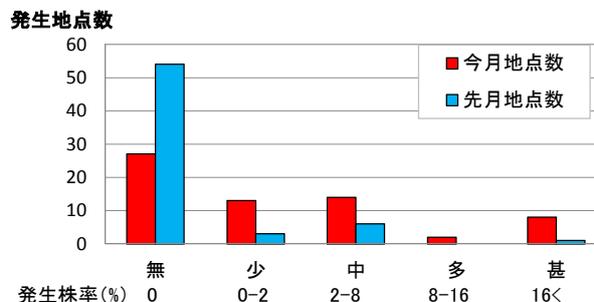


図4 アザミウマ類発生程度別の地点数

○今月の技術情報（技術指導班）○（4月）

・ 4月に入り、灰色かび病、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類、アザミウマ類の発生は増加しています。特に、ハダニ類、アザミウマ類については、発生が多く見られるほ場がありますので、注意が必要です。

・ 今後、水稲作業等の重なる繁忙期となりますが、病害虫の急増するこの時期の防除が今シーズンの出荷量、販売額を左右します。

・ ハウス内の適正な温度管理、下葉かきなど病害虫の発生しにくい環境整備に努め、最後まで良好な生育、品質のいいいちごの出荷に努めましょう。

・ 作柄安定には良質苗の確保が重要です。次年産親株ハウスの適正な温度やかん水管理を徹底するとともに、収穫中のハウスから病害虫を持ち込まないように注意しましょう。



写真1 ワタアブラムシの被害



写真2 花に寄生するヒラズハナアザミウマ

＜平成30年産いちご主要病害虫の発生経過＞

本年作では8月には曇雨天日、10月には記録的な長雨が続き、いちごの栽培面では苦勞をした年だったと思います。また、近年は天候の変動が大きくなる傾向があり、病害虫管理が難しくなっています。気象情報や病害虫発生予察情報に注意を払い、加えてほ場を丁寧に観察し、防除対策が後手に回らないようにしましょう。

1 炭疽病

・10月、1月に平年より発生が多く確認されました。健全苗の育苗に努め、本圃での発生を減らせるように、発生前から定期的な予防散布を行うなどの対策を心がけましょう。

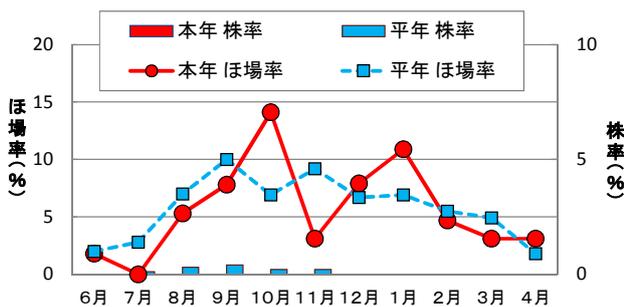


図1 炭疽病発生ほ場率・株率



写真1 育苗期の炭疽病の葉の斑点病斑

2 萎黄病

・本ぼ定植後から発生が見られ始め、徐々に発生ほ場率が増加し、12月に発生のピークとなりました。発生の見られたほ場は発病株残さ等を適切に処分し、土壌消毒をしっかりと行いましょう。また、乾燥等による根痛みしやすい環境下で発生が助長されますので、仮植時のかん水量や回数に注意しましょう。

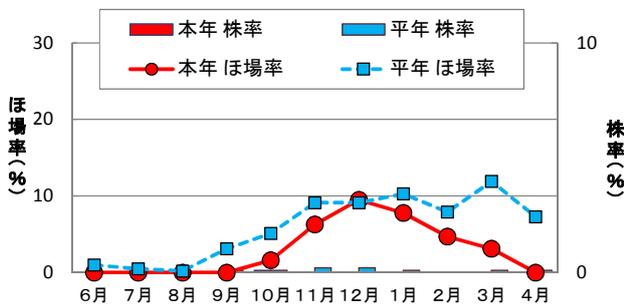


図2 萎黄病発生ほ場率・株率



写真2 萎黄病発病株(小葉の大きさが不均一)

3 うどんこ病

・6、7月に発生が平年より少なかった。6、7月は平年より降水量が少なかったため、うどんこ病の発生も低く推移したものと考えられます。比較的低温性の病害のため、夏期の高温時には発生が減少しますが、この時期にも予防散布を継続することで、秋以降の発生が抑えられます。

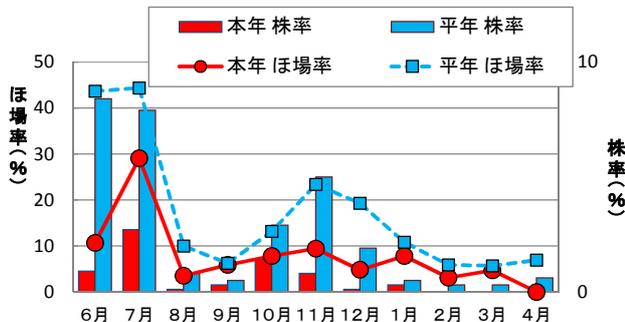


図3 うどんこ病発生ほ場率・株率



写真3 うどんこ病が発生した葉と果実

#### 4 ハダニ類

・年間を通して、発生が見られますが、特に6月は80%を越すほ場率で平年よりも高いほ場率となりました。ほ場内の観察を怠らず、状況により適切に対応することが重要です。薬剤に対する感受性は低下の傾向にありますが、気門封鎖剤や天敵製剤を上手に活用しましょう。

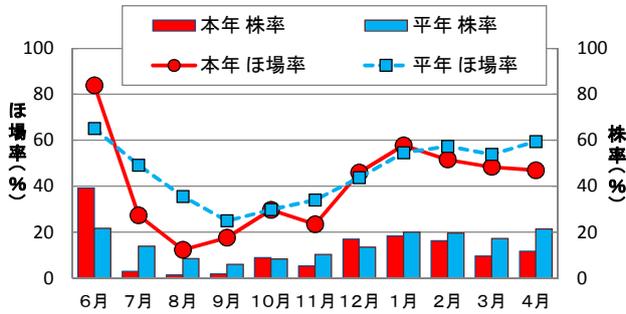


図4 ハダニ発生ほ場率・株率



写真4 ハダニ類多発により糸を張られた様子

#### 5 アブラムシ類・アザミウマ類

・アブラムシ類・アザミウマ類は年内は平年より少ない発生でしたが、年明け以降増加しました。いずれも早期発見、早期防除により多発を防ぐこと、薬剤が良くかかるように丁寧な散布を心掛けることが重要です。

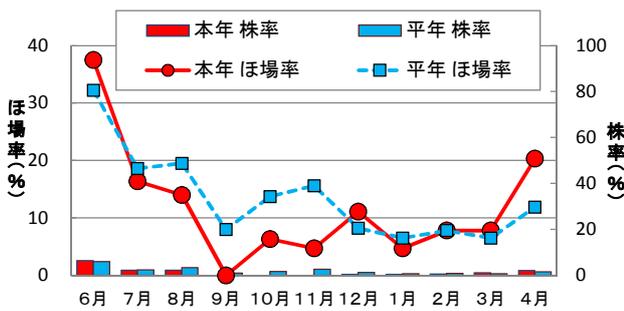


図5 アブラムシ発生ほ場率・株率



写真5 ワタアブラムシが多発したいちご株

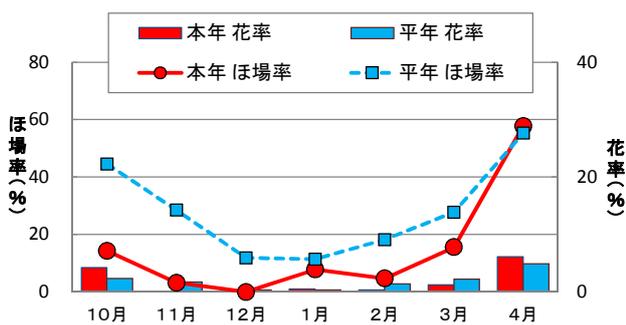


図6 アザミウマ類発生ほ場率・株率



写真6 ヒラズハナアザミウマ雌成虫(左)とアザミウマ類による被害果(右)

・いちご本ぽで発生する病害虫は育苗床からの持ち込みが多い傾向がみられます。育苗期間中に病害虫の徹底した防除を行い、本ぽに持ち込まないようにしましょう。  
(技術情報班情報提供)

## ○今月の病害虫発生状況○

- ・ **うどんこ病**及び**灰色かび病**の発生は少ないです。
- ・ **アブラムシ類**の発生はやや多いです。
- ・ **ハダニ類**、**コナジラミ類**及び**アザミウマ類**の発生は平年並からやや少ないです。

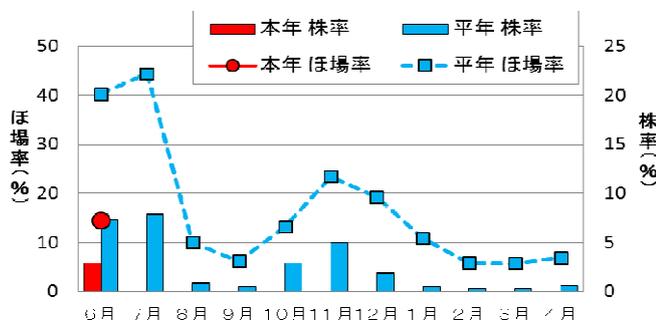


図1 うどんこ病発生ほ場率・株率

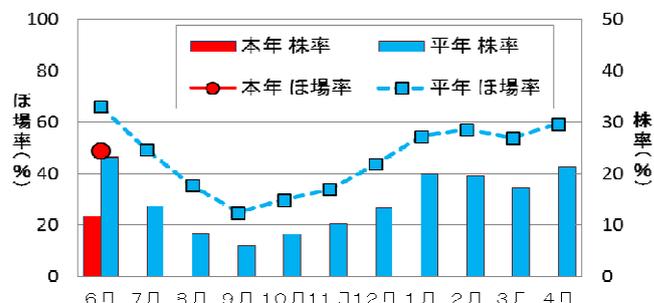


図3 ハダニ類発生ほ場率・株率

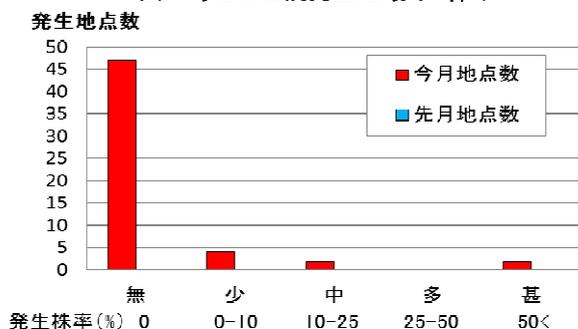


図2 うどんこ病発生程度別の地点数

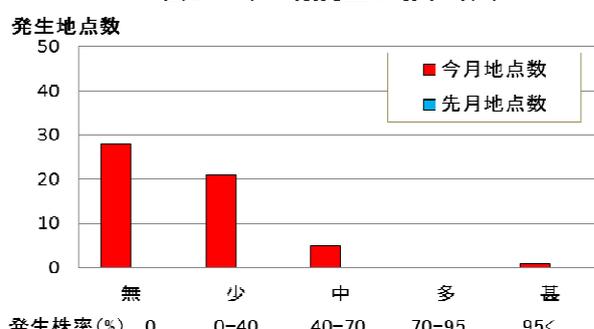


図4 ハダニ類発生程度別の地点数

## ○今月の技術情報（技術指導班）○（6月）

・ 高温傾向で降水量が少なかったため、病害の発生は平年よりも少ない状況でした。しかし、6月6日に梅雨入りしており、今後曇雨天が多くなると病害が発生しやすくなります。育苗ほの一部では、すでにうどんこ病の発生が確認され、やや多く発生しているほ場も見られますので、ほ場観察と発生予察情報を参考に防除意識を高めましょう。

・ まもなく採苗作業が始まります。この時期の適切な管理が、今後の良質苗の確保に大きな影響を与えます。高温傾向で根が傷みやすい環境にあります。根の周りの水が滞留した状態では病原菌が繁殖しやすくなりますので、適切なかん水量や排水に注意しましょう。

・ 一方、害虫では、高温で降水量が少なく乾燥した状態が続いた影響もあり、アブラムシ類、ハダニ類の発生が平年並かやや多く見られますので、早期発見と適期防除に努めましょう。育苗ほのみでなく、ほ場周辺的环境整備もしっかり行いましょう。



写真1 葉のうどんこ病



写真2 糸を張るナミハダニ

# いちご病害虫情報第2号(7月)

平成30(2018)年7月20日  
栃木県農業環境指導センター

## ○今月の病害虫発生状況○

- ・炭疽病の発生は少ないです。
- ・うどんこ病の発生はやや少ないです。
- ・ハダニ類の発生は平年並みです。
- ・アブラムシ類及びコナジラミ類の発生はやや少ないです。

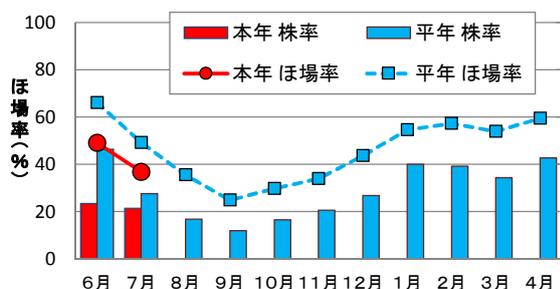


図1 ハダニ類発生ほ場率・株率

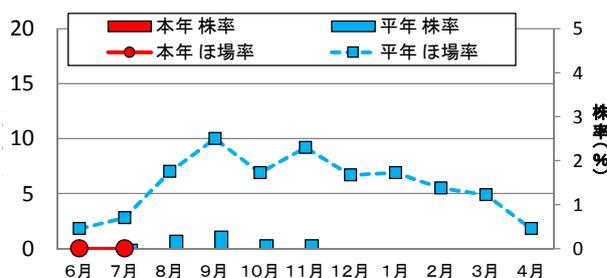


図3 炭疽病発生ほ場率・株率

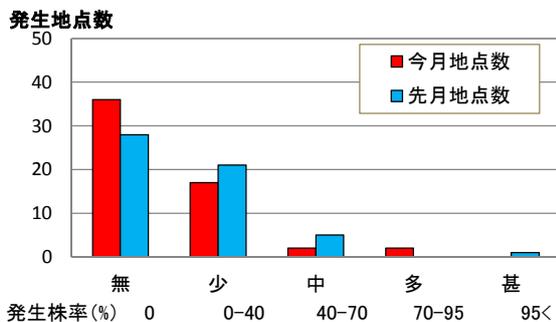


図2 ハダニ類発生程度別の地点数



写真1 葉柄の炭疽病

## ○今月の技術情報(技術指導班)○(7月)

・現在、病害虫は、平年並から少ない状況となっておりますが、高温傾向で推移したことから、炭疽病、萎黄病の発生が増加しています。

・6月29日の梅雨明け後、一時天候がぐずついたものの、今後も気温の高い傾向が続く見込みであり、炭疽病、萎黄病の発生しやすい環境になります。苗床での発生、被害が拡大しないよう、ほ場観察と発生予察情報を参考に防除意識を高めましょう。

・一方、うどんこ病の発生は、現在やや少ない状況ですが、気温が低下してくる秋以降の再発をなくすため、夏期にも予防を継続することがポイントです。

・育苗期間中に病害虫の徹底した防除を行い、本ほに持ち込まないようにしましょう。また、育苗床のみならず、ほ場周辺の環境整備を行い、害虫の発生密度を減らすよう努めましょう。



写真2 炭疽病の斑点型病斑



写真3 糸を張るナミハダニ

## ○今月の病害虫発生状況○

- ・炭疽病、うどんこ病及び萎黄病の発生は少ないです。
- ・ハダニ類及びアブラムシ類の発生は平年並みです。
- ・ハスモンヨトウ幼虫の発生はやや多いです。

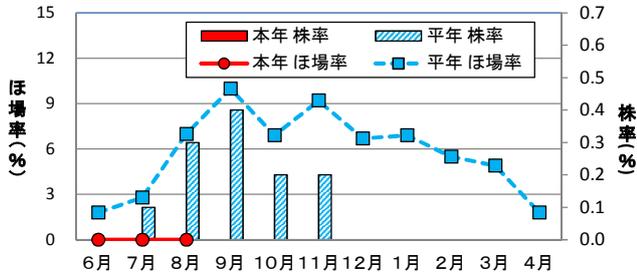


図1 炭疽病発生ほ場率・発生株率の推移

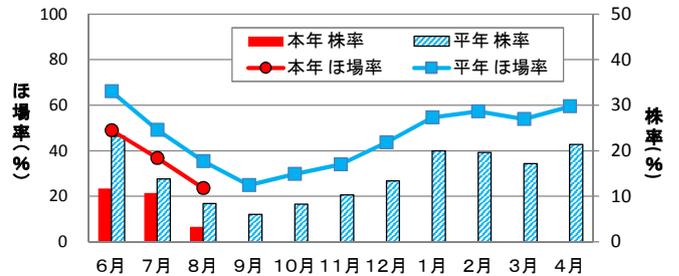


図3 ハダニ類発生ほ場率・発生株率の推移

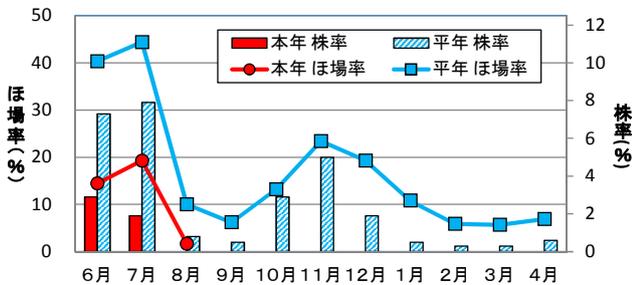


図2 うどんこ病発生ほ場率・発生株率の推移

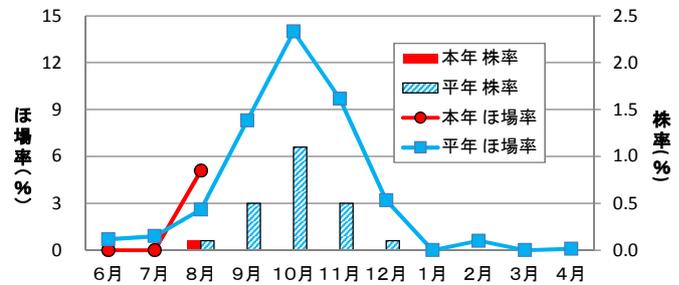


図4 ハスモンヨトウ幼虫発生ほ場率・発生株率の推移

## ○今月の技術情報（技術指導班）○（8月）

・現在、病害虫の発生は、全体的には平年並から少ない状況となっていますが、ハスモンヨトウ幼虫の発生が平年よりやや多く見られます。高温、少雨傾向で推移したことから、炭疽病、萎黄病、ハダニ類、アザミウマ類の発生が見られます。

・日常のこまめな観察により、病害虫の早期発見に努め、本ばに持ち込まないように、育苗床でしっかりと防除しましょう。

・向こう1か月の天候の見通しでは、今後も気温は高い見込みとなっており、生育の停滞による苗の充実不足も懸念されます。育苗も後半となりますが、日照に応じた遮光や育苗ポットの並べ替え、かん水量の調整等により、定植までに、揃いが良く、クラウンの太い、充実した苗ができるよう心がけてください。



写真1 炭疽病・クラウンの病徴



写真2 ハスモンヨトウ中齢幼虫

## ○今月の病害虫発生状況○

- ・炭疽病の発生はやや少なく、うどんこ病及び萎黄病の発生は少ないです。
- ・ハダニ類の発生は少ないです。
- ・ハスモンヨトウの本ぽにおける幼虫発生は平年並ですが、フェロモントラップの成虫誘殺数はやや多いです。

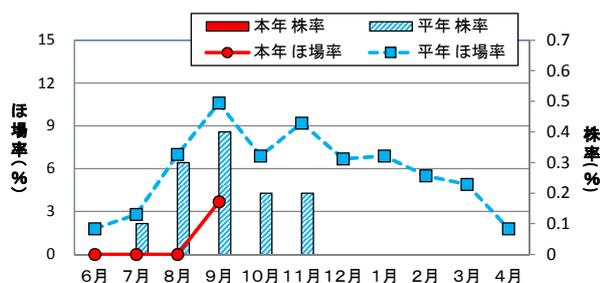


図1 炭疽病発生ほ場率・発生株率の推移

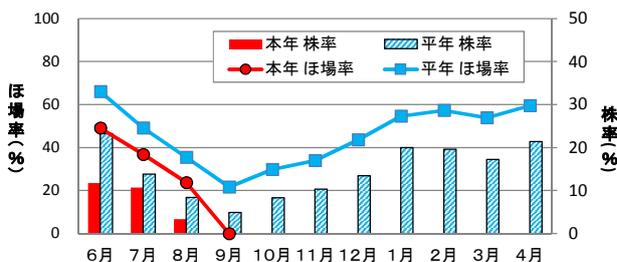


図3 ハダニ類発生ほ場率・発生株率の推移

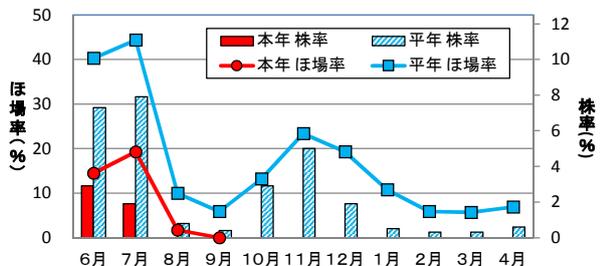


図2 うどんこ病発生ほ場率・発生株率の推移

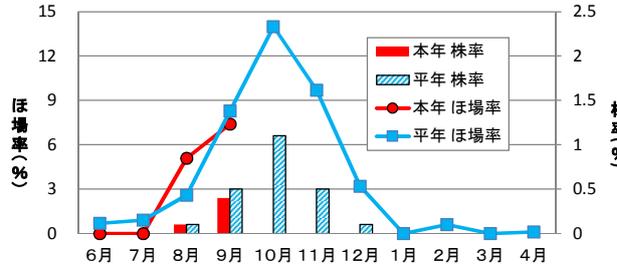


図4 ハスモンヨトウ幼虫発生ほ場率・発生株率の推移

## ○今月の技術情報（技術指導班）○（9月）

- ・育苗期の高温の影響により、頂花房の花芽分化にばらつきが見られますが、定植作業はおおむね順調に進んでいます。
- ・定植後の土壌水分が不足すると、初期生育が抑制されますので、不定根の発生と畝内部への根張りを促進するため、かん水は少量多回数で行いましょう。そして、地上部と地下部のバランスのとれた生育となるように適正な草勢管理に心がけることが大切です。
- ・現在の病害虫の発生は、平年並から少ない状況ですが、日常のこまめな観察により病害虫の早期発見に努め、発生が見られた場合は、本ぽでの発生が拡大しないよう、天敵やミツバチ導入期、保温開始までにしっかりと防除しましょう。
- ・向こう1か月の平均気温は高い見込みとなっていますので、マルチ張りは一次腋花房の花芽分化期以降に行うようにしましょう。日頃から最新の気象情報をこまめにチェックし、いちごの生育に合わせた適期作業を心がけてください。



写真1 炭疽病-クラウンの病徴



写真2 葉に発生したうどんこ病

## ○今月の病害虫発生状況○

- ・炭疽病の発生は平年並みで、うどんこ病及び萎黄病の発生は少ないです。
- ・ハダニ類及びコナジラミ類の発生は少ないです。
- ・ハスモンヨトウの本ぽにおける幼虫発生はやや少なく、フェロモントラップの成虫誘殺数はやや多いです。

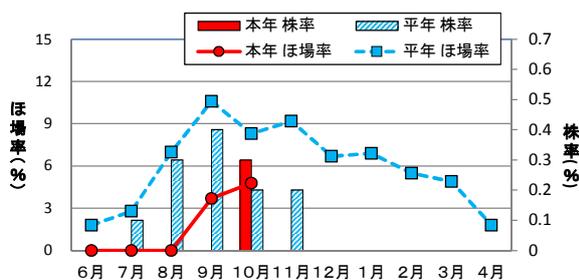


図1 炭疽病発生ほ場率・発生株率の推移

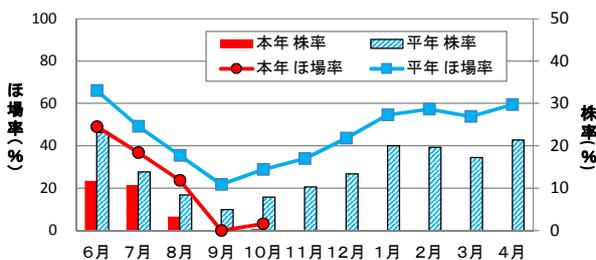


図3 ハダニ類発生ほ場率・発生株率の推移

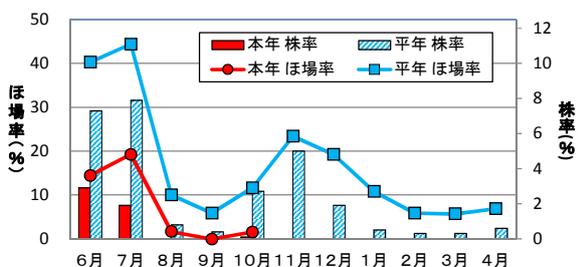


図2 うどんこ病発生ほ場率・発生株率の推移

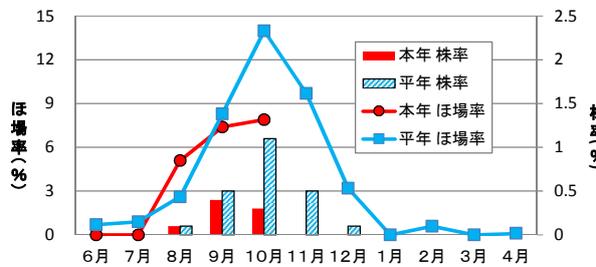


図4 ハスモンヨトウ幼虫発生ほ場率・発生株率の推移

## ○今月の技術情報(技術指導班)○(10月)

・現在の病害虫の発生は、平年並から少ない状況となっています。育苗期には炭疽病、萎黄病の発生が見られました。

・向こう1か月の平均気温は平年並か高い見込みで、マルチングや保温開始に伴い、これらの病害が再度発生する恐れがあります。病害を発見した場合は、直ちに抜取り処分をしてください。

・害虫は、保温開始までの防除を重点に行いましょう。特に、天敵を導入するほ場は、農薬の影響日数を考慮しながら、天敵導入前の防除を徹底しましょう。

・育苗期は、高温の影響により生育が停滞したことで、株の充実不良が見られました。定植後の活着はおおむね順調でしたが、9月の日照不足の影響により葉の展開が緩慢となっています。株にできるだけ光を当てて光合成を促進させ、しっかりとした株を作ることが重要です。



写真1 炭疽病・クラウンの病徴



写真2 ハスモンヨトウ中齢幼虫

## ○今月の病害虫発生状況○

- ・炭疽病の発生は多く、うどんこ病の発生は少ないです。
- ・ハダニ類の発生はやや少なく、アザミウマ類の発生はやや多いです。
- ・ハスモンヨトウの本ぽにおける幼虫発生はやや多いです。

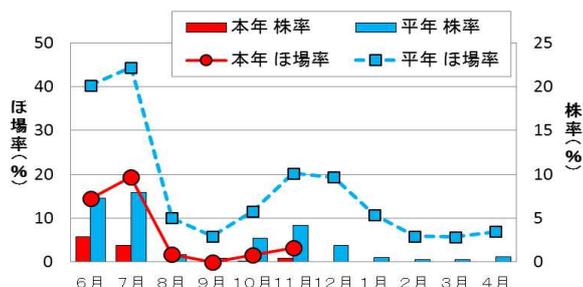


図1 うどんこ病発生ほ場率・株率

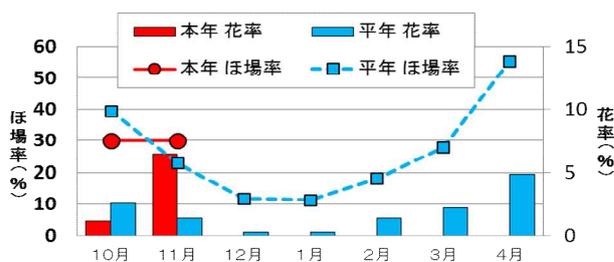


図3 アザミウマ類(花)発生ほ場率・花率

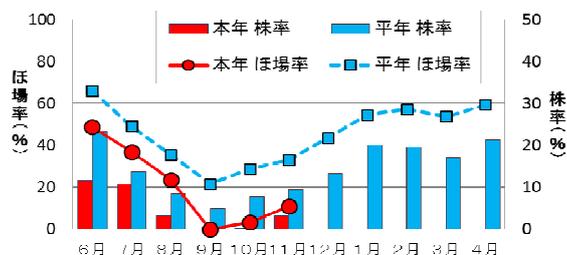


図2 ハダニ類発生ほ場率・株率

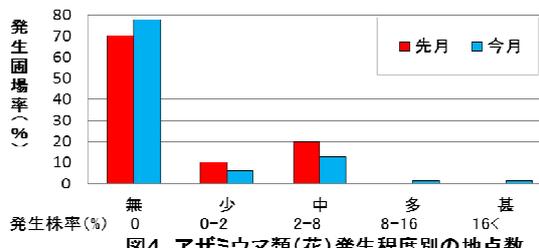


図4 アザミウマ類(花)発生程度別の地点数

## ○今月の技術情報(技術指導班)○(11月)

・いちごの生育は、10月以降天候が回復したことでおおむね順調に推移していますが、定植後に日照時間が少なかったことから、根張りの悪い状況が見られます。株にできるだけ光を当てて光合成を促進させ、しっかりとした株をつくるのが重要です。

・現在の病害虫の発生は、全体的に平年並から少ない状況となっていますが、保温開始後一部でうどんこ病やハダニ類の発生も見られています。ほ場をよく観察し、病害虫の早期発見早期防除を心掛けましょう。

・すでに天敵を導入しているほ場は、天敵の効果を過信することなく害虫の発生を小まめに確認しましょう。これから天敵を放飼するほ場では、農薬の天敵に対する影響日数を考慮して薬剤を選定し、防除を徹底しましょう。

・今後は、気温の低下や降雨等により低温多湿条件となることから、灰色かび病等の発生が懸念されます。高品質ないちごの生産に向けて、適切な温湿度管理を行いましょう。



写真1 花に寄生するヒラズハナアザミウマ



写真2 ハスモンヨトウ中齢幼虫

## ○今月の病害虫発生状況○

- ・炭疽病の発生は平年並、うどんこ病の発生は少ないです。
- ・ハダニ類の発生はやや少なく、アザミウマ類の発生は平年並です。
- ・ハスモンヨトウの本ぽにおける幼虫発生は多いです。

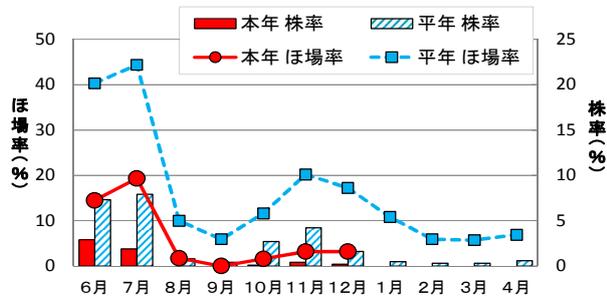


図1 うどんこ病発生ほ場率・株率

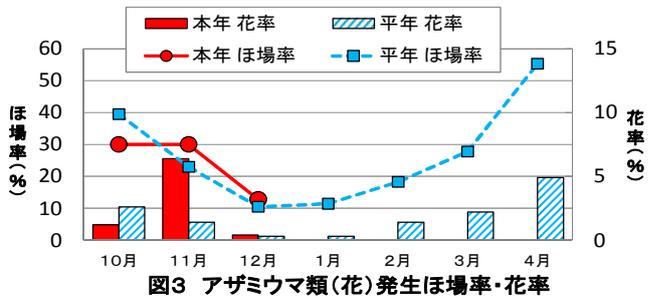


図3 アザミウマ類(花)発生ほ場率・花率

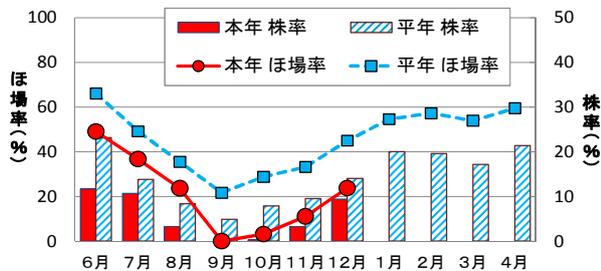


図2 ハダニ類発生ほ場率・株率

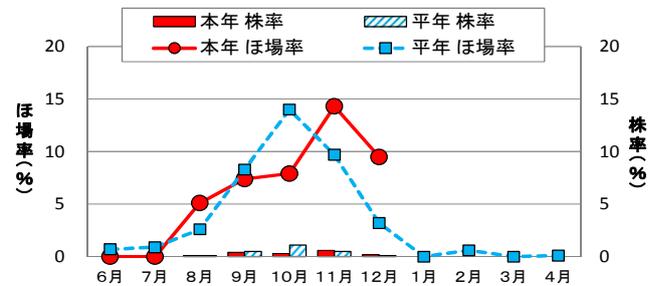


図4 ハスモンヨトウ幼虫発生ほ場率・株率

## ○今月の技術情報（技術指導班）○（12月）

・いちごの生育は、「とちおとめ」、「スカイベリー」とともに、株によるばらつきが見られるものの概ね順調ですが、高温傾向で推移してきたため、着色が早く、出荷が前進化しています。

・現在の病害虫の発生は、うどんこ病、ハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類の発生が散見されますが、全体的には平年並か少ない傾向です。

・ハダニ類やアザミウマ類に対する天敵の導入は、年々増加傾向にあります。しかし、その効果は、放飼時期やほ場環境により差が生じます。天敵を導入しているからと過信するのではなく、ほ場をよく観察し、害虫の発生が多く見られる場合には、天敵に対する農業の影響日数を考慮しながら、速やかに防除しましょう。

・1か月気象予報では、気温は高く、降水量は多く、日照時間は少ないと発表されています。ハウスの密閉時間が長くなるとハウス内の湿度が高くなり、灰色かび病や菌核病の発生が懸念されますので、適切な温湿度管理を行いましょう。



写真1 糸を張るナミハダニ



写真2 花に寄生するヒラズハナアザミウマ

## 平成30(2018)年度病害虫発生予察特殊報第1号

平成30(2018)年8月17日  
栃木県農業環境指導センター

### ブドウミタマバエ(仮称)のブドウでの発生について

- 1 害虫名 和名：ブドウミタマバエ(仮称) (ハエ目：タマバエ科)  
学名：*Asphondylia* sp.
- 2 発生作物名：ブドウ (品種：シャインマスカット)
- 3 発生経過
  - (1) 平成30年6月に、日光市の雨よけ栽培のシャインマスカットにおいて、果粒の奇形化が確認された。奇形化した果粒を切開したところ、タマバエ科蛹の寄生が認められた(写真1、写真2、写真3)。上地奈美博士(農研機構果樹茶業研究部門生産・流通研究領域虫害ユニット)に同定を依頼した結果、ブドウミタマバエ(仮称) *Asphondylia* sp.と判明した。
  - (2) 分布及び発生状況  
国内では平成24年に初めて確認され、現在までに、福島県と宮城県で発生が確認されている。なお、平成29年に福島で特殊報の報告がされている。栃木県内では、日光市の2園地(シャインマスカット)において確認されている。
- 4 被害の特徴  
寄生された果粒は虫こぶが発生する。被害果粒は異常肥大し奇形化するが、その後肥大が止まるため、正常果粒の肥大に伴って目立たなくなる。ブドウの成熟期に寄生された果粒の虫こぶは、奇形・肥大化しないため、正常な果粒との区別は難しいが、蛹殻が果面に残ることがある。
- 5 形態及び生態
  - (1) 幼虫は3齢を経る。3齢幼虫(終齢)は黄白色で、1.2~2mmの大きさである。幼虫は果粒中心の隙間に生息しており、その付近の果肉表面が褐色に変色しているが、果肉の食害は認められない。
  - (2) 蛹は体長2.5mm程度、褐色で果粒中に見られ、果粒表面に穴をあけて体を半分果粒外に出して羽化し、蛹殻は果粒表面に残る(写真4、写真5)。
  - (3) 成虫は雄翅長2.5~3.3mm、雌翅長は3~3.5mmの大きさであり、発生時期は6~8月である(写真6)。
  - (4) 産卵は開花期に果粒(子房)中にされると考えられる。幼虫は果粒中に1頭ずつ寄生し、寄生された果粒は異常肥大し奇形化するため、正常果粒の肥大に伴って目立たなくなる。
- 6 防除対策
  - (1) 開花後の6月中旬ごろに寄生果粒・果房を除去し、水漬けにする等適切に処分する。この時期以降は正常果粒の肥大が進み、寄生果粒との区別が困難になるため、適期を逃さないように注意する。
  - (2) 寄生が確認された品種以外にも本種が寄生するおそれがあるので、果房をよく観察し、疑わしい果房は適切に処分する。



写真1 ほ場の様子 (シャインマスカット)



写真2 奇形化した果粒



写真3 正常な果粒 (左) と奇形化した果粒 (右)



写真4 ブドウミタマバエ蛹



写真5 ブドウミタマバエ蛹殻



写真6 ブドウミタマバエ成虫

## 7 引用文献

福島県(2017)平成 29 年度病害虫発生予察特殊報第 1 号

佐々木正剛ら(2018):植物防疫 第 72 巻第 2 号 33~37.

---

詳細は、農業環境指導センター (Tel 028-626-3086) までお問合せ下さい。  
病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センター  
ホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。

---

# 平成30(2018)年度病害虫発生予察特殊報第2号

平成30(2018)年10月3日  
栃木県農業環境指導センター

---

## ミツユビナミハダニのトマトでの発生について

- 1 害虫名 和名：ミツユビナミハダニ  
学名：*Tetranychus evansi* Baker & Pritchard
- 2 発生作物名：トマト
- 3 発生経過
  - (1) 平成30(2018)年8月、宇都宮市の雨よけ栽培トマトにおいて、葉に白化症状が生じ、葉裏に橙色のハダニが高密度で発生していた。採取したハダニを横浜植物防疫所に同定依頼した結果、ミツユビナミハダニと赤色型のナミハダニの混発であることが判明した。
  - (2) 分布及び発生状況  
国内では平成13(2001)年に大阪府と京都府のイヌホオズキで初めて発生が確認され、現在までに関東以西の一部地域（群馬県、東京都、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、高知県、福岡県、長崎県、鹿児島県、沖縄県）から発生の報告がある。
- 4 被害の特徴  
主に葉裏に寄生し、発生初期には葉表に小斑点を発生させ、多発すると寄生部位が白化し、高密度になると枯死に至る。
- 5 形態及び生態
  - (1) 雌成虫は体長0.6mm程度で体色はくすんだ橙色～濃橙色、雄成虫は体長0.5mm程度で乳白色～淡橙色、第3静止期の若虫は緑色である。
  - (2) 寄主植物はトマト、ミニトマト、ジャガイモ、ナス、ピーマン、トウガラシ、パプリカ、ホオズキ、イヌホオズキ、ワルナスビ等のナス科植物に特化している。
  - (3) ナミハダニやカンザワハダニを上回る高い増殖能力がある。
  - (4) 本種は休眠性を示さず、耐寒性も低いので、本県での野外越冬は困難であると考えられる。また、本県での分布は不明である。
- 6 防除対策
  - (1) ほ場周辺のナス科雑草（イヌホオズキ、ワルナスビ等）は、本種の発生源となるので、除草に努める。
  - (2) 収穫終了後の株や残渣は本種の発生源となる可能性があるため、早めに処分する。
  - (3) ハダニ類に登録のある殺ダニ剤での防除が有効である。
  - (4) ハダニ類に登録のある天敵製剤のミヤコカブリダニ剤やチリカブリダニ剤では、ミツユビナミハダニを捕食できないため、防除効果が期待できない。



写真1 小斑点が生じた被害葉



写真2 高密度で寄生するミツユビナミハダニ



写真3 ミツユビナミハダニ雌成虫

## 7 引用文献

- 植物防疫所病害虫情報 第109号(2016年7月15日)  
後藤哲雄(2010):植物防疫 第64巻第4号 49~53.  
小坪遊ら(2004):日本ダニ学会誌, 13(1):71~76.  
群馬県(2015)平成27年度病害虫発生予察特殊報第1号  
和歌山県(2017)平成29年度病害虫発生予察特殊報第1号

---

詳細は、農業環境指導センター (TEL 028-626-3086) までお問合せ下さい。  
病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センター  
ホームページ (<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。

# 平成30(2018)年度病害虫発生予察特殊報第3号

平成30(2018)年10月4日  
栃木県農業環境指導センター

## オウトウショウジョウバエ類のいちごでの発生について

### 1 害虫名

A 和名：オウトウショウジョウバエ 学名：*Drosophila suzukii*

B 和名：ニセオウトウショウジョウバエ 学名：*Drosophila pulchrella*

\*上記の2種は近縁種である。相違のある部分については個別の説明を加える(A、B)。

### 2 発生作物名：いちご

### 3 発生経過

(1) 平成30(2018)年8月に、塩谷町の施設栽培の夏いちごにおいて、収穫後の果実に穴が開いて腐敗する症状が確認された(写真1、2)。このため、ほ場から熟度の異なる果実を採取し、熟度別に別容器に保管したところ、熟した果実からウジ状の幼虫が発生・加害し腐敗した。この幼虫を飼育し羽化させ形態観察したところ、オウトウショウジョウバエ及びニセオウトウショウジョウバエの混発であることが判明した。

#### (2) 分布及び発生状況

A:日本を含む東アジア原産だが、欧州や北米にも侵入している。国内では本県のブドウ、千葉県のブルーベリー、徳島県のヤマモモ、福島県のオウトウ、ブルーベリー及びブドウにおいて被害報告例がある。

B:本州、四国、九州、北海道、中国東部に分布する。オウトウショウジョウバエと同所的に生息する。

### 4 被害の特徴

雌成虫が熟したいちご果実に産卵し、孵化した幼虫は果実内部に食入する。食害された果実は腐敗し、果汁がしみ出てショウジョウバエ類の発生源となる。

### 5 形態

(1) A、B 両種の形態は似る。成虫は体長 3mm 弱、暗黄褐色、雄は後方に向かって多少とも暗色となり、翅頂近くに小黑紋を有する。なお、小黑斑は羽化直後では不明瞭である。雌の尾端にある産卵器の下縁には、鋸歯状突起が並ぶ(写真3、4)。

(2) 蛹の体長は4mm内外で外被は赤褐色。前端の1対の突起は、先端が多数の刺状に分かれる(写真5)。

(3) 幼虫は体長約6mmに達し、白色のウジ状。卵は乳白色、長径0.5mm内外の1対の糸状突起を有する。

(4) 両種の識別は、雄では翅の先端前縁の黒い斑紋と性楯の形で行う。雌では導卵突起の形で判断する。幼虫、蛹の形態での識別は困難である。

### 6 生態及び生活史

A:寄主植物はオウトウ、キイチゴ、クワ、ブルーベリーなど約20種が知られる。関東地方北部での発生回数は年間10回程度であり、成虫は落葉下などで越冬する。卵から成虫までの発育日数は15℃で約30日、22℃で約14日、25℃で約10日である。発育に必要な最低気温(発育零点)は約9℃である。

B:寄主植物はブルーベリー、ラズベリー、ブラックベリー等が知られる。オウトウショウジョウバエと比べ低温性で年間の発生回数が少なく、発生時期が遅い。生態、生活史については不明な部分が多い。

### 7 防除対策

(1) 本種は様々な果実の熟果に寄生するため、適期収穫を行い、被害を軽減する。

(2) 本種による被害果は見つけ次第取り除き、土中に埋める等処分する。

(3) 平成30(2018)年10月4日現在、いちごのショウジョウバエ類に登録のある農薬はない。



写真1 ほ場の様子



写真2 幼虫が果実を食害する様子



写真3 オウトウショウジヨウバエ雄成虫



写真4 ニセオウトウショウジヨウバエ雄成虫



写真5 蛹

## 8 引用文献

栃木県(2009)平成21年度病害虫発生予察特殊報第3号

瀬戸昌宣ら(2015):植物防疫 第69巻第2号 77~82.

佐々木正剛ら(1996):東北農業研究 49, 161-162.

---

詳細は、農業環境指導センター (Tel 028-626-3086) までお問合せ下さい。  
病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センター ホームページ (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。

# 平成 30(2018)年度病害虫発生予察特殊報第 4 号

平成 30(2018)年 12 月 20 日  
栃木県農業環境指導センター

## トルコギキョウ斑点病の発生について

1 病原 *Pseudocercospora nepheloides* (= *P. eustomatis*)

2 発生作物名：トルコギキョウ

3 発生経過

平成30(2018)年11月、栃木県内の施設栽培のトルコギキョウにおいて、葉にすす状の斑点を生じる病害が確認された。横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、本県では未発生の*Pseudocercospora nepheloides*によるトルコギキョウ斑点病であることが確認された。

本病は、平成20(2008)年に福岡県で初めて発生が確認され、平成29(2017)年には福岡県、高知県、大分県、熊本県、宮崎県、長崎県で、平成30(2018)年には和歌山県、沖縄県、広島県、福島県、宮城県、島根県、千葉県、岡山県で特殊報が発表されている。

4 病徴

はじめ、葉の表に5～10mm程度の退緑斑を生じ、後に葉の表裏に黒～灰褐色のすす状病斑となる。病斑は下位葉を中心に発生し、その後、上位葉へと伸展する(写真1、2、3)。

病斑上には小黒点(分生子座)が多数形成される(写真4)。

5 病原菌と伝染

病原菌は、糸状菌の一種で不完全菌に属する。分生子座は濃褐色で直径26.9～45.6 $\mu\text{m}$ (写真3)、分生子柄は淡褐色～褐色で子座上に束生する。分生子は無色(淡オリーブ色)、倒棍棒状で、大きさは25.7～43.3 $\mu\text{m}$ ×3.8～4.9 $\mu\text{m}$ 、0～7個の隔壁を有する(写真5)。

本病は盛夏を除き、ほぼ年間を通して発生するが、特に春から秋の多湿条件下で多発する。生態や伝染環についての詳細は不明であるが、育苗中および本圃で発生し、病斑上に形成される分生子により伝染する。

なお、現在確認されている宿主はトルコギキョウのみである。

6 防除対策

- (1) 多湿条件で発生が助長されるため、施設内の通風および換気に努める。
- (2) 発病を見つけた場合は、すみやかに発病葉を取り除き、ほ場外に持ち出して適切に処分する。
- (3) 発病葉を取り除いた後、次の薬剤を散布する。

薬剤名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法
ダコニール1000	1000倍	100～300L/10a	—	6回以内	散布



写真1 圃場での発病状況



写真2 下位葉の発病状況



写真3 病斑 (左:表、右:裏)



写真4 葉裏の病斑に形成された分生子座 (小黒点)



写真5 分生子

## 7 引用文献

- 千葉県(2018)平成30年度病害虫発生予察特殊報第1号  
岡山県(2018)平成30年度病害虫発生予察特殊報第3号  
成山秀樹(2018):植物防疫 第72巻第9号46~49

---

詳細は、農業環境指導センター (Tel 028-626-3086) までお問合せ下さい。  
病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。

## いちごのアザミウマ類による春先の被害増加を、 適期防除で抑えましょう！

今作のいちご本ぼでのアザミウマ類の発生は、秋期から「やや少ない～少ない」状況で推移しており、2月上旬のいちご本ぼの巡回調査結果は、発生ほ場率 4.7% (平年比 25.8%)、寄生花率 0.3% (平年比 21%) とやや少ない状況です(図1)。しかし、ハウス内の温度が高くなるこれからの時期は、アザミウマ類の活動が活発になり増加しやすいため、被害が拡大する場合があります。アザミウマ類を多発させてしまうと、一度の防除では被害の抑制が困難になるので、ほ場をこまめに観察して少発生のうちに対応しましょう。

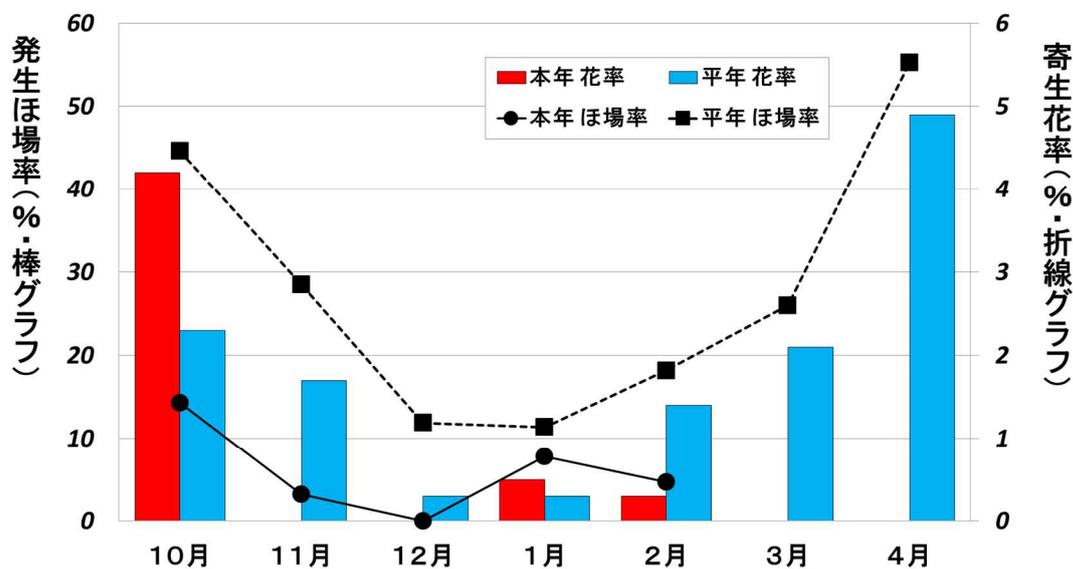


図1 果実加害性アザミウマ類発生ほ場率・花率



図2 アザミウマ類の食害による被害果



図3 花に寄生するヒラズハナアザミウマ

## ◎防除対策

- ・アザミウマ類の発生初期から IGR 剤を散布し、発生量を抑制しましょう。また、幼果に図2のような褐変が、ほ場内で僅かでも見られる場合は、アザミウマ類が増殖している証拠ですので直ちに防除が必要です。
- ・1割以上の花でアザミウマ類（図3）が見られるときは、IGR 剤だけでは抑制が難しい状態です。ディアナ SC、スピノエース顆粒水和剤など成虫にも効果の高い薬剤も使用しましょう。
- ・ハウスの換気量が増大する時期になると、ハウス外から大量に成虫が飛び込んで来るので、成虫にも効果の高い薬剤を交えた防除が必要になります。
- ・多発時には、薬剤がかからない卵や蛹が混在するため、一度の薬剤散布では防除することが困難です。IGR 剤の散布から約5日後に、スピノエース顆粒水和剤などを追加散布することで、高い防除効果が得られます。

表1 いちごのアザミウマ類に登録がある主要薬剤（平成30年2月28日現在）

薬剤系統名	農薬名	防除の対象	収穫前日数	天敵カブリダニ類との併用	ミツバチ影響日数	IRACコード*3
IGR（ベンゾイル尿素）	カウンター乳剤	幼虫	収穫前日まで	可	1日	15
	マッチ乳剤*1	幼虫	収穫前日まで	可	1日	15
スピノシン	スピノエース顆粒水和剤	成虫・幼虫	収穫前日まで	*2	3日	5
	ディアナSC	成虫・幼虫	収穫前日まで	*2	3日	5
ピレスロイド	アーデント水和剤*1	成虫・幼虫	収穫前日まで	不可	2日	3A
環状ケトエノール	モベントフロアブル	成虫*4・幼虫	収穫前日まで	不可	1日	23

\*1 登録害虫はミカンキイロアザミウマ。

\*2 天敵カブリダニ類に影響があるので、基本的には天敵を放飼してから1か月後以降に使用する。またアザミウマ類、ハダニ類の発生状況をよく見て判断する。

\*3 IRACコードが同一のものは作用点が同じなので、薬剤抵抗性発達の観点から連用を避ける。

\*4 成虫に対しては効果が劣る。

詳細は、農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

## 麦類の赤かび病発生に注意しましょう！

麦類の赤かび病は、子実収量や品質を低下させる重要病害です（写真1）。本病菌は人畜に有害なかび毒（DON、NIV等）を産生するため、農産物検査規格では食用麦の赤かび粒混入限度が全麦種で0.0%以下となっています。このため、予防的に防除を行い、発生防止に努めることが重要です。

本年産の麦の生育は、播種遅れ等の影響で平年より遅れていましたが、3月中旬以降高温が続き、出穂期は平年より早まる見込みです。また播種時期の違いによる生育差が大きく、**同じ地域でもほ場ごとに生育のばらつき**が見られますので、**防除に際しても注意が必要**です。ほ場ごとに**出穂や開花**の状況をよく観察し、**麦種ごとの防除適期**に留意し、赤かび病防除を行きましょう。



写真1 赤かび病(二条大麦)

### 【防除対策】

- ・麦類の生育状況に合わせた適期防除が重要である。**六条大麦や小麦は2回防除が基本となる(表1)**
- ・**薬剤感受性の低下を予防するため、異なるグループの薬剤をローテーション散布する(表2, 3)**
- ・**不稔粒が発生したほ場は、赤かび病多発のおそれがあるため追加防除を実施する。**

表1 麦種ごとの防除適期

麦種	防除適期	多発のおそれがある場合 (不稔粒発生や登熟期連続降雨など)
二条大麦	穂揃い期7～10日後（葯殻抽出期※1）	1回目の7～10日後に2回目散布
六条大麦	開花始め※2と1回目の10日後の2回散布	3回目散布
小麦	開花始め※2と1回目の20日後の2回散布	3回目散布

※1：穎の先端から葯殻(受粉を終えた葯の殻)が押し出されてくる時期

※2：抽出した葯を初めて認めた日



写真2 【二条大麦】  
穂揃い期7～10日後  
(葯殻抽出期)



写真3 【六条大麦】  
開花始め



写真4 【小麦】  
開花始め

※矢印の黒色部分が抽出した葯殻

表2 麦類の赤かび病に登録のある主な薬剤（平成30（2018）年4月9日現在）

薬剤名	作物名	希釈倍数 (散布液量)	収穫前日数/ 本剤の使用回数	薬剤系統名	FRAC コード
シルバキュアフロ アブル	大麦	2,000倍 (60～150L/10a)	14日前まで/2回以内	E B I	3
	小麦	2,000倍 (60～150L/10a)	7日前まで/2回以内		
ワークアップフロ アブル	大麦	2,000倍 (60～150L/10a)	7日前まで/3回以内		
	麦類 (大麦を除く)				
チルト乳剤25	大麦	1,000～2,000倍 (60～150L/10a)	21日前まで/1回		
	小麦	1,000～2,000倍 (60～150L/10a)	3日前まで/3回以内		
トップジンMゾル	麦類 (小麦を除く)	1,500倍 (60～150L/10a)	14日前まで/3回以内 (出穂期以降は1回以内)	ベンズイ ミダゾ ール	1
	小麦	1,000～1,500倍 (60～150L/10a)	14日前まで/3回以内 (出穂期以降は2回以内)		
トップジンM水和剤	麦類 (小麦を除く)	1,000～1,500倍 (60～150L/10a)	30日前まで/3回以内 (出穂期以降は1回以内)		
	小麦	1,000～1,500倍 (60～150L/10a)	14日前まで/3回以内 (出穂期以降は2回以内)		
ストロビーフロ アブル	麦類 (小麦を除く)	2,000～3,000倍 (60～150L/10a)	14日前まで/3回以内	ストロビ ルリン	11
	小麦				

注1) 必ず農薬容器のラベルをよく読み、使用方法・使用上の注意事項を守る。

注2) FRACコードが同一のものは作用点が同じなので、連用を避ける。

表3 無人ヘリコプターによる散布の登録がある主な薬剤（平成30（2018）年4月9日現在）

薬剤名	作物名	希釈倍数 (散布液量)	収穫前日数/ 本剤の使用回数	薬剤系統名	FRAC コード
シルバキュアフロ アブル	大麦	16倍(0.8L/10a)	14日前まで/2回以内	E B I	3
	小麦	16倍(0.8L/10a)	7日前まで/2回以内		
ワークアップフロ アブル	大麦	10～16倍(0.8L/10a)	7日前まで/3回以内		
	麦類 (大麦を除く)				
チルト乳剤25	大麦	8倍(800mL/10a)	21日前まで/1回		
	小麦	8倍(800mL/10a)	7日前まで/3回以内		
トップジンMゾル	麦類 (小麦を除く)	8倍(0.8L/10a)	21日前まで/3回以内 (出穂期以降は1回以内)	ベンズイミダ ゾール	1
	小麦	8倍(0.8L/10a)	14日前まで/3回以内 (出穂期以降は2回以内)		

注1) 必ず農薬容器のラベルをよく読み、使用方法・使用上の注意事項を守る。

注2) FRACコードが同一のものは作用点が同じなので、連用を避ける。

詳細は、農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せ下さい。

病虫害情報発表のお知らせは「栃木県農政部ツイッター(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

## クビアカツヤカミキリの発生に注意しましょう！

栃木県内では、平成28(2016)年に初めて確認されたクビアカツヤカミキリは、平成29(2017)年には足利市、佐野市、栃木市で確認されています（佐野市、足利市ではモモ、スモモの被害あり）。これ以上、発生を拡大させないためにも、早期発見により適切に防除しましょう。

### 1. クビアカツヤカミキリの生態等

幼虫がウメ、モモ、サクラ等の生木に食入し樹木を衰弱させ、加害が進むと枯死に至る。幼虫は4～10月頃に摂食し、成虫は6～8月頃に出現して幹や樹皮の割れ目に産卵する。成虫の体長は3～4cm(下限2.5cm)で、体色は光沢のある黒色、胸部は明赤色(写真1)である。1世代は2～3年。

### 2. 被害の特徴

幼虫は孵化後樹皮下に穿孔して形成層を食害するが、成長して排糞量が多くなると樹皮表面に排糞孔を開けてフラス（糞・木くず・樹脂等の混合物）を排出する。フラスは、うどん状につながったひき肉のような様相を呈する（写真2）が、春先や枯木からは固まらずに粉状になることもある。被害量が多くなると、株元はフラスの山で覆われるようになる（写真3）。

### 3. 早期発見による拡散防止

飛翔による拡散を防ぐには、フラス排出穴を見つけ幼虫を防除することが重要である。ただし、羽化前年秋に樹幹内部に蛹室が形成されると、殺虫剤が到達しにくく防除効果が劣るため、防除対象は成虫が中心となる。幼虫の摂食開始から成虫羽化期の4～6月頃の観察が重要である。

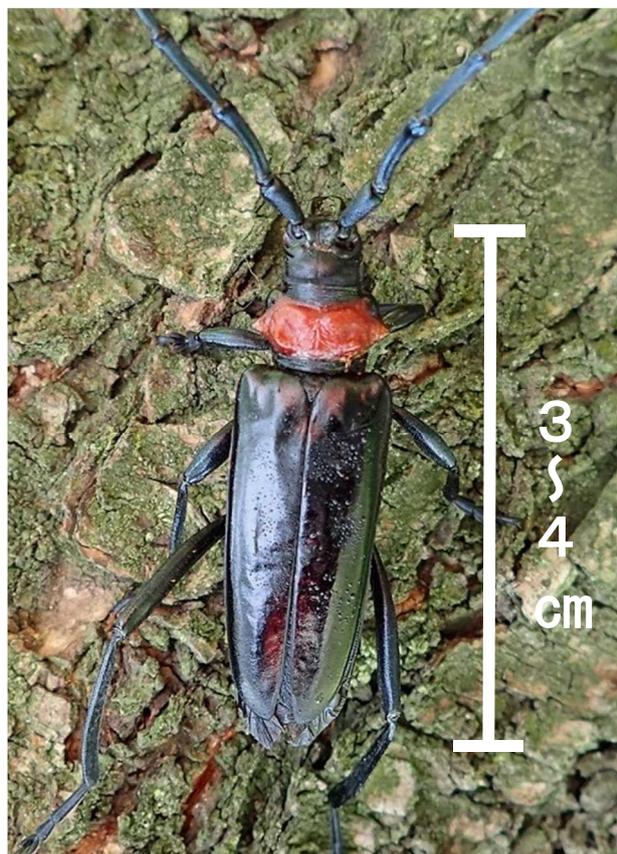


写真1 クビアカツヤカミキリ成虫



写真2 うどん状につながったフラス



写真3 株元に排出された大量のフラス

#### 4. 防除対策

- (1) 羽化した成虫の分散や産卵を防止するため、樹幹部にネット(容易に切れない目開き4mm以下のもの)等を巻き付ける。この際、幹とネット等の間が密着していると幼虫や成虫が食い破るため、幹に密着しないように巻く。また、定期的に園内を見回り、ネット内の成虫は速やかにハンマー等で撲殺し、ネット外の成虫は捕殺する。捕獲する際、刺激臭を放つ場合があるので注意する。
- (2) フラスが排出される幼虫食入孔を見つけた場合には、針金や千枚通し等でフラスを掻き出し、針金で刺殺するか、幼虫を防除対象とした薬剤を使用する。なお、現在の登録農薬は以下のとおりである。使用にあたっては指導機関に相談する。
- (3) 被害の大きい樹は倒木などの危険があるため伐採し粉砕するか、市町の規定に従い適切に処分する。また、伐採後の切り株はビニールシート等で覆い内部から成虫が羽化することを防ぐ。

(注) 本種は特定外来生物に指定されていますので、飼育・保管、輸入、販売、譲り渡し、野外へ放つことが禁止されています。

#### ☆ クビアカツヤカミキリの防除薬剤 (平成30(2018)年4月26日現在)

作物名	適用害虫名	薬剤名	希釈倍率	使用方法	使用時期	本剤の使用回数	IRAC
うめ、もも	カミキリムシ類	ロビンフード	—	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	収穫前日まで	2回以内	3A
		ベニカカミキリムシエアゾール	—				3A
果樹類	カミキリムシ類	ロビンフード	—	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	収穫前日まで	2回以内	3A
		ベニカカミキリムシエアゾール	—				3A
		バイオリサ・カミキリ	1樹当り1本	地際に近い主幹の分枝部分等に架ける。	成虫発生初期	—	—
さくら	クビアカツヤカミキリ	ロビンフード	—	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	—	6回以内	3A
		ベニカカミキリムシエアゾール	—				3A
		園芸用キンチョール	—	【専用ノズルつけかえ方式】 容器のボタンを引き抜き、専用ノズルにつけかえ、食入部にノズルを差し込み、薬剤が食入部から流出するまで噴射する。	—	—	3A
				【2ウェイノズル方式】 折り畳まれた専用ノズルを引き上げ、食入部にノズルを差し込み、薬剤が食入部から流出するまで噴射する。			
		バイオリサ・カミキリ	1樹当り1本	主幹又は主幹の分枝部分に巻き付ける	成虫発生初期	—	—
アクセルフロアブル	100倍	木屑排出孔を中心に薬液が滴るまで樹幹注入	—	6回以内	22B		

詳細は、農業環境指導センター (TEL 028-626-3086) までお問合せ下さい。  
 病害虫情報発表のお知らせは「農政部ツイッター(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。

## イネ縞葉枯病(ヒメトビウンカ媒介)の防除を実施しましょう！

平成30年5月10～23日に、ヒメトビウンカ第一世代幼虫を麦類ほ場から採集し、イネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率を調査した結果、県平均が6.7%と昨年並みに高い値であり、特に県中南部では10%を超える地点が複数確認されました(表1)。一方、ヒメトビウンカ第一世代幼虫の麦類ほ場での生息密度は、県平均の平年比が28.3%と低い状況でした(表2)。これは、ヒメトビウンカ越冬世代幼虫の密度が低かったこと(昨年11月:12.0頭/10m<sup>2</sup>(県平均)、平年比18.7%、詳細は[平成29年度植物防疫ニュース\(速報No.12\)](#)を参照)、冬期間の気温が平年より低かったこと等による越冬数の減少が原因と考えられます。現在、ヒメトビウンカ幼虫の発生は少ない状況ですが、今後発生が増加した場合は、イネ縞葉枯病の発病が懸念されます。本病の発生拡大を防ぐためにも、ヒメトビウンカの適切な防除を実施しましょう。

表1 ヒメトビウンカ第一世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率(%) (単位:%)

地点名		年度	H28 2016	H29 2017	H30 2018
県北部	大田原市親園		4.2	4.2	2.1
	大田原市蛭畑		5.2	0.0	3.1
	さくら市松山新田		6.3	3.1	6.3
	高根沢町花岡		1.0	2.1	2.1
県中部	真岡市青田		15.6	10.4	15.6
	宇都宮市横山町		7.3	6.3	5.2
	宇都宮市雀宮		8.3	6.3	10.4
	上三川町上三川		6.3	6.3	12.5
	鹿沼市酒野谷		4.2	3.1	7.3
県南部	下野市小金井		11.5	4.2	4.2
	下野市絹板		11.5	11.5	21.9
	小山市小葉		4.2	11.5	5.2
	小山市石ノ上		11.5	13.5	10.4
	壬生町助谷		4.2	8.3	3.1
	栃木市惣社町		3.1	2.1	3.1
	栃木市大平町真弓		9.4	9.4	2.1
	栃木市藤岡町富吉		7.3	2.1	3.1
	佐野市堀米町		3.1	8.3	8.3
	足利市上渋垂町		5.2	6.3	1.0
県北部平均			4.2	2.3	3.4
県中部平均			8.3	6.5	10.2
県南部平均			7.1	7.7	6.3
県平均			6.8	6.3	6.7



写真 イネ縞葉枯病の病徴



写真左 ヒメトビウンカ雌成虫

右 ヒメトビウンカ幼虫

注:検定サンプルは、平成30(2018)年5月10～23日に麦類ほ場から採集したヒメトビウンカ第一世代幼虫  
検定方法: DAS-ELISA法 検定数: 96頭/1地点

表2 ヒメトビウンカ(第一世代)の麦類ほ場での生息密度(頭/10m<sup>2</sup>)

	幼虫					成虫				
	H28 2016	H29 2017	H30 2018	平年比 (%)	前年比 (%)	H28 2016	H29 2017	H30 2018	平年比 (%)	前年比 (%)
県北部平均	201.0	357.0	85.5	38.1	23.9	5.3	0.0	0.0	0.0	—
県中部平均	148.2	44.4	34.2	19.8	77.0	1.2	0.0	3.0	61.9	—
県南部平均	332.4	237.9	93.6	28.4	39.3	7.5	2.7	0.6	6.0	22.2
県平均	256.3	212.1	76.3	28.3	36.0	5.4	1.4	1.1	14.9	77.8

平成30(2018)年5月10～23日調査

平年比は平成26(2014)年～平成29(2017)年の4カ年平均を平年値とし算出した

防除対策

(1) 移植前の対策：普通植栽培

普通植栽培ではチョウ目害虫の被害も懸念されるため、ウンカ類・チョウ目害虫の両方に登録のある箱施用剤を使用する（表3）。

表3 稲（箱育苗）のウンカ類・チョウ目害虫に登録のある主な薬剤  
（平成30(2018)年5月16日現在）

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期	本剤の 使用回数	成分	農薬の系統	RAC コード
<b>●殺虫剤</b>						
ワンリードSP箱粒剤 〈ウンカ類, イネトムシ, ニカメイチュウ, フタオビコヤカ, コブノメイカ〉	育苗箱(30×60×3cm、使用土壌約5L)1箱当り50g	は種前	1回	クロチアニジン	ネオニコチノイド	I : 4A
		は種時(覆土前)～移植当日		スピネトラム	スピノシン	I : 5
フェルテラチェス箱粒剤 〈ウンカ類, ニカメイチュウ, コブノメイカ〉 ※フタオビコヤカ, イネトムシ	育苗箱(30×60×3cm、使用土壌約5L)1箱当り50g	は種時(覆土前)～移植当日	1回	ピメトロジン	ピリジンアゾメチン	I : 9(B)
		※フタオビコヤカ, イネトムシは移植3日前～移植当日		クロラントラニリプロール	ジアミド	I : 28
<b>●殺虫殺菌剤</b>						
ルーチンアドスピノ箱粒剤 〈ウンカ類, イネトムシ, フタオビコヤカ, ニカメイチュウ, コブノメイカ〉	育苗箱(30×60×3cm、使用土壌約5L)1箱当り50g	は種前	1回	イミダクロプリド	ネオニコチノイド	I : 4A
		は種時(覆土前)～移植当日		スピノサド	スピノシン	I : 5
エバーゴルド箱粒剤 エバーゴルドプラス箱粒剤 〈ウンカ類, イネトムシ, フタオビコヤカ, ニカメイチュウ, コブノメイカ〉	育苗箱(30×60×3cm、使用土壌約5L)1箱当り50g	は種前	1回	イミダクロプリド	ネオニコチノイド	I : 4A
		は種時(覆土前)～移植当日		クロラントラニリプロール	ジアミド	I : 28
				イソチアニル	その他(殺菌)	F : P03
				ペンフルフェン	カルボキシアミド(殺菌)	F : 7

注1：      はウンカ類に有効な殺虫成分      はチョウ目害虫に有効な殺虫成分

注2： 対象害虫はウンカ類・チョウ目のみ抜粋

注3： RACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

(2) 本田での対策：早植・普通植栽培

本ウイルスを媒介するヒメトビウンカの本田防除を、各地域での発生状況に合わせ地域ぐるみで行う。なお、箱施用剤を使用したほ場で本田防除を行う場合は、同一系統薬剤の連用を避ける（表4）。

表4 稲のウンカ類に登録のある主な薬剤（平成30(2018)年5月16日現在）

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期	本剤の 使用回数	成分	農薬の系統	RAC コード
<b>●粒剤</b>						
スタークル豆つぶ	250～500g/10a	収穫7日前まで	3回以内	ジノテフラン	ネオニコチノイド	I : 4A
ダントツ粒剤	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	クロチアニジン		
<b>●液剤</b>						
スタークル液剤10	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	ジノテフラン	ネオニコチノイド	I : 4A
スタークルメイト液剤10						
ダントツ水溶剤	4000倍	収穫7日前まで	3回以内	クロチアニジン	ピレスロイド	I : 3(A)
MR. ジョーカーEW	2000倍	収穫14日前まで	2回以内	シラフルオフェン		
トレボンEW	1000倍	収穫14日前まで	3回以内	エトフェンプロックス		

注1： RACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

詳細は、農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

## 今後の斑点米カメムシ類の動向に注意しましょう！

斑点米カメムシ類は、水稻の籾を吸汁し斑点米を発生させる重要な害虫です。水田内へは周辺の畦畔や雑草地に生えるイネ科雑草から飛来するため、これらの雑草を対象に6月中旬に発生調査を実施しました。

その結果、斑点米カメムシ類全体の発生は平年に比べやや少ない状況でした（表1、図1）。

しかし3ヶ月予報によれば、向こう3ヶ月の平均気温は高いと予想されており、気温の上昇と共に斑点米カメムシ類の水田への飛来や、その後の発生量が急増する可能性があります。

水田内、畦畔及び水田周辺の雑草管理を適切に実施するとともに、出穂期以降、水田を観察して斑点米カメムシ類（写真1）の侵入が認められる場合は、表2を参考に適切な薬剤防除を行いましょう。

表1 イネ科雑草地における斑点米カメムシ類の発生状況

分類	発生地点率(%)		頭数(頭)		発生概評
	H30	平年	H30	平年	
クモヘリカメムシ	0.0	14.5	0.0	1.4	少
ホソハリカメムシ	28.2	44.0	0.5	1.2	やや少
アカヒゲホソミドリカスミカメ	82.1	93.1	32.3	23.6	平年並
アカスジカスミカメ	66.7	80.1	6.6	60.6	やや少
<b>斑点米カメムシ類</b>	<b>97.4</b>	<b>99.4</b>	<b>44.0</b>	<b>91.1</b>	<b>やや少</b>

※平成30年6月18、19日に、39地点で20回振りすくい取り調査を実施。  
 ※平年値は、平成20～29年の10年間の平均値（調査時期6月中旬～7月初旬）。  
 ※斑点米カメムシ類は、上記4種及びその他斑点米カメムシ類の合計。



図1 斑点米カメムシ類の地点別発生状況

程度	無	少	やや少	平年並	やや多	多
平年比(%)	0	1~19	20~59	60~140	141~180	181~
記号	×	△	○	◎	▲	●



写真1 斑点米カメムシ類

（上から：クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ）

※線の間隔は1mm

## 《防除対策》

### ○耕種的防除～除草によりイネ科雑草の出穂を抑えましょう～

- ・イネ科雑草の穂には斑点米カメムシ類が集まるので、畦畔及び水田周辺の除草を、



行うことで、イネ科雑草の出穂を長期間抑制でき、斑点米カメムシ類の水田への侵入を低減することができます。

- ・2回の除草ができない場合は、遅くとも水稲の出穂期10日前までに除草を済ませましょう。詳しくは、病虫害防除対策のポイントNo.16「斑点米カメムシ類の防除対策」参照  
(農業環境指導センターホームページトップ-防除課-技術情報)

<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/file/gijutu/point/No16.pdf>

- ・水田内でイネ科雑草（ヒエ等）やホタルイ等が出穂すると、斑点米カメムシ類を水田へ誘引するため、できるだけ早めの除草に努めましょう。特に、ホタルイの小穂（写真2）はアカスジカスミカメを誘引するので注意が必要です。



写真2 ホタルイの小穂

### ○薬剤防除～適期に防除しましょう～

- ・出穂期～穂揃期頃に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、液剤ならば乳熟期初期（出穂期7～10日後）まで、粒剤ならば出穂期～出穂期7日後までに防除しましょう。
- ・その後も斑点米カメムシ類が見られる際は、7～10日間隔で1～2回の追加散布を行いましょう。

表2 水稲のカメムシ類に登録のある主な薬剤(平成30(2018)年6月25日現在)

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期	本剤の 使用回数	成分	農薬の系統	RAC コード
ダントツ粒剤	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	クロチアニジン	ネオニコチノイド	I:4A
スタークル液剤10	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	ジノテフラン		
スタークルメイト液剤10				ピレスロイド	I:3A	
MR. ジョーカーEW	2000倍	収穫14日前まで	2回以内			シラフルオフェン
トレボンEW	1000倍	収穫14日前まで	3回以内	エトフェンプロックス		
キラップフロアブル	1000～2000倍	収穫14日前まで	2回以内	エチプロール	フェニルピラゾール	I:2B

注：RACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

※水稲の斑点米カメムシ類防除の薬剤がミツバチに被害を及ぼすことがありますので、養蜂家の方々へ農薬散布日を周知する等の積極的な対応をお願いします。

詳細は、農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せ下さい。  
病虫害情報発表のお知らせは「農政部ツイッター(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。



6月～8月は「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。  
いつものチェック！ 農薬を使用する際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！

## 大豆のべと病・紫斑病の発生に注意しましょう！

平成29年産大豆は登熟期の長雨等により、べと病や紫斑病等による被害粒が多発しました。このため本年は、ほ場内の伝染源（昨年被害茎葉）量が例年より多いと考えられ、今後、発生に好適な条件が重なるとこれら病害が多発するおそれがあります。適期に防除対策を徹底しましょう。

### 1 ベと病の特徴

- (1) 病原菌は糸状菌で、比較的冷涼で降雨が多いときに多発する。主に葉に発生するが、子実も侵される。子実や被害茎葉で越冬し、翌年の伝染源となる。
- (2) 葉が侵されると、初め淡黄白・円形の小斑点を生じ、しだいに融合して不整形の褐色病斑になり早期落葉する。
- (3) 子実が侵されると、表皮が乳白色から黄褐色のカサブタ状になり、粒の大きさが健全粒に比べ小さくなる。



写真左：べと病（葉表）



写真中：べと病（葉裏）



写真右：べと病（子実）

### 2 ベと病の防除対策

- (1) **開花10日前～子実肥大期**に薬剤防除する。
  - ①開花前にべと病が発生した場合は、茎葉に薬剤を散布する。
  - ②開花後の早い時期に薬剤を散布する。
  - ③発生が拡大する場合は、開花40日後までに追加防除する。
- (2) 調製は丁寧に行い、べと病粒を除去する。
- (3) 多発したほ場は連作しない。
- (4) 過繁茂で風通しが悪いと発病しやすいため、密植や早播きをしない。

表1 大豆のべと病に登録のある主な防除薬剤（平成30(2018)年7月13日現在）

薬剤名	希釈倍数 使用量	使用方法（散布流量）	使用時期	使用回数	有効成分名（グループ名）	FRAC コード
ランマンフロアブル	1000～2000倍	散布(100～300L/10a)	収穫7日前まで	3回以内	シアゾファミド (Qii殺菌剤)	21
アミスター20フロアブル※	2000倍	散布(100～300L/10a)	収穫7日前まで	2回以内	アゾキシストロビン (Qoi殺菌剤)	11
ベトファイター顆粒水和剤	2000～3000倍	散布(100～300L/10a)	収穫7日前まで	2回以内	シモキサニル(シアノアセト アミド-オキシム)、ベンチア バリカルブイソプロピル (CAA殺菌剤)	27 40
フェスティバルC水和剤	600倍	散布(100～300L/10a)	収穫7日前まで	3回以内	ジメモルフ(CAA殺菌剤)、 銅(無機化合物)	40 M01
プロポーズ顆粒水和剤	1000倍	散布(100～300L/10a)	収穫21日前まで	2回以内	ベンチアバリカルブイソプロ ピル(CAA殺菌剤)、TPN(ク ロロニトリル)	40 M05
リドミルゴールドMZ	500倍	散布(100～300L/10a)	収穫45日前まで	3回以内	マンゼブ(ジチオカーバメー ト)、メタラキシル及びメタラ キシルM(PA殺菌剤)	M03 4
撒粉ボルドー粉剤DL	4kg/10a	散布	-	-	銅(無機化合物)	M01

※アミスター20フロアブルは、耐性菌が発生しやすいので隔年使用とし、同一年における使用回数は1回とする。

※FRACコードが同一のものは作用点が同じなので、連用を避ける。

### 3 紫斑病の特徴

- (1) 病原菌は糸状菌で、結実期頃の気温が18℃前後で降雨が多いときに多発する。
- (2) 種子や葉に発生し、種子では臍（へそ）を中心に表面に紫色の斑点を生ずる。ひどい場合は種皮の大部分が紫色に変じて品質を大幅に低下させる。
- (3) 病原菌は種子で菌糸の形で越冬し、翌年、種皮上に形成された分生子から、子葉、葉、さや、種子へと侵入する。前年度の被害茎葉も伝染源となる。



写真：紫斑病（子実）

### 4 紫斑病の防除対策

- (1) 防除効果が高いQoI殺菌剤（アミスター20フロアブル）を基軸にした防除体系とする。ただし、アミスター20フロアブルの成分「アゾキシストロビン」は耐性菌が出現しやすいので、本剤は隔年使用とする。
- (2) 散布回数は、アミスター20フロアブルは原則1回、それ以外の薬剤は2回とする。その際、1回目と2回目は異なるグループの薬剤を使用する。
- (3) 散布時期は**開花15～35日後**とし、1回目散布はこの期間の早い時期に行う。QoI殺菌剤とDMI殺菌剤（マネージDF、サンリット水和剤等）は予防効果と治療効果が期待できるが、無機化合物（Zボルドー等）は予防効果のみ、ビスグアニジン（ベルコートフロアブル等）は予防効果は高いが治療効果は低いので、散布時期が遅れないようにする。
- (4) 薬剤散布は茎葉にまんべんなく付着するように丁寧に行う。
- (5) ベンゾイミダゾール系の薬剤（トップジン、ベンレート）は、耐性菌発生率が高いので使用しない。
- (6) 収穫後乾燥せずに放置すると、紫斑粒率が増加するので、収穫後は速やかに乾燥する。
- (7) 紫斑病が多発した場合は秋耕を行い、罹病した被害茎葉を土中に埋める。

表2 大豆の紫斑病に登録のある主な防除薬剤(平成30(2018)年7月13日現在)

薬剤名	希釈倍数	使用方法(散布液量)	使用時期	使用回数	有効成分名(グループ名)	FRACコード
アミスター20フロアブル※	2000～3000倍	散布(100～300L/10a)	収穫7日前まで	2回以内	アゾキシストロビン(QoI殺菌剤)	11
マネージDF	3000倍	散布(100～300L/10a)	収穫30日前まで	2回以内	イミベンコナゾール(DMI殺菌剤)	3
サンリット水和剤	1000～2000倍	散布(100～300L/10a)	収穫14日前まで	2回以内	シメコナゾール(DMI殺菌剤)	3
ベルコートフロアブル	1000倍	散布(100～300L/10a)	収穫7日前まで	4回以内	イミノクタジンアルベシル酸塩(ビスグアニジン)	M07
Zボルドー	500倍	散布(100～300L/10a)	-	-	銅(無機化合物)	M01

※アミスター20フロアブルは、耐性菌が発生しやすいので隔年使用とし、同一年における使用回数は1回とする。

※FRACコードが同一のものは作用点が同じなので、連用を避ける。

詳細は、農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せ下さい。

病虫害情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、[農業環境指導センターホームページ \(http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html\)](http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html) でもご覧いただけます。

## 斑点米カメムシ類の発生が急増しています！

7月中旬に、牧草地及びイネ科雑草地における斑点米カメムシ類の発生調査を行った結果、すべての調査地点で発生が確認され、全体として「やや多い」概評となりました（図1，2）。特に、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメは、前回調査時に比べ発生量が急増しています（表1）。

今後高温傾向が予想されており、現時点で斑点米カメムシ類の発生が少ない地域でも今後増加する可能性があるため注意が必要です。

特に、水稻に割れ籽が発生すると、登熟期後半にカスミカメ類による吸汁が容易になり、斑点米の被害拡大が懸念されます。下記を参考に防除対策を行きましょう。

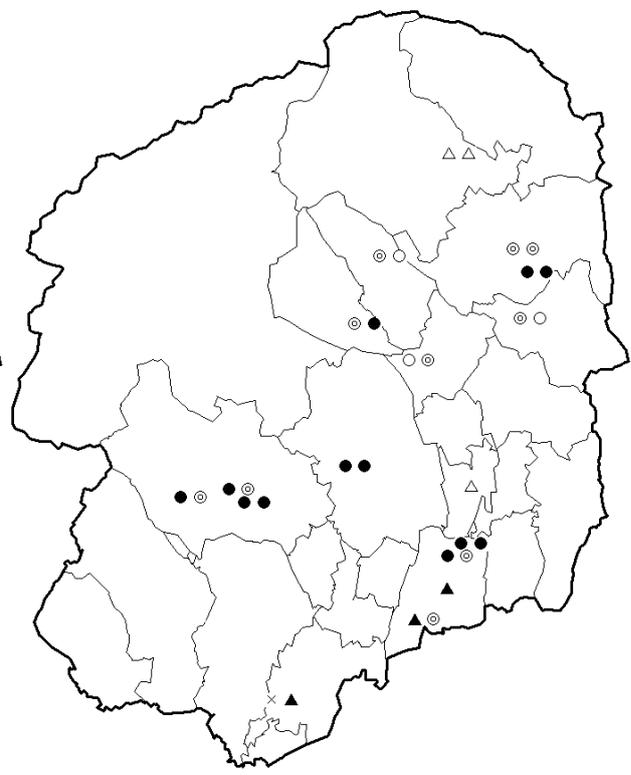
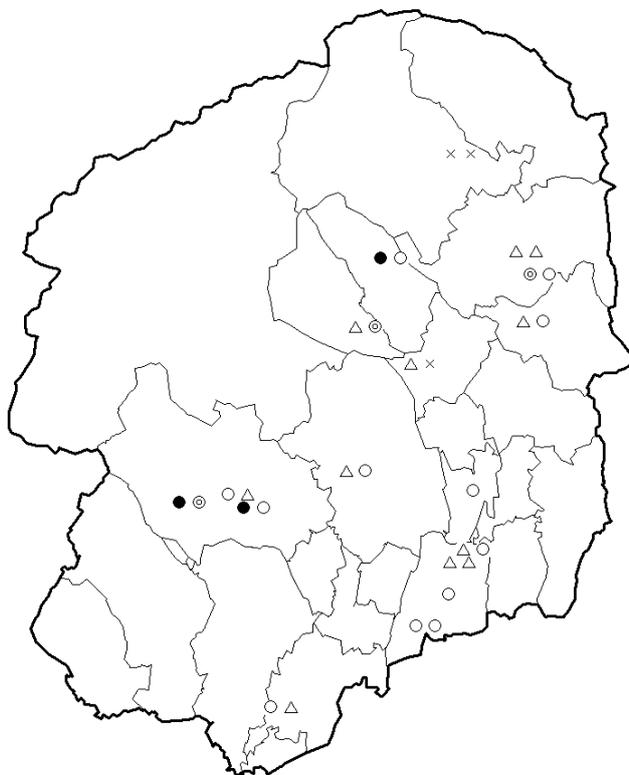
表1 牧草地及びイネ科雑草地における斑点米カメムシ類の発生状況

種名	発生地点率(%)				発生頭数(頭)				発生概評
	H30(2018)		7月 平年 7月	7月 平年比 (%)	H30(2018)		7月 平年 7月	7月 平年比 (%)	
	6月	7月			6月	7月			
クモヘリカメムシ	0.0	56.3	45.7	123	0.0	19.0	25.3	75	平年並
ホソハリカメムシ	28.2	75.0	74.6	101	0.5	3.4	3.8	89	平年並
アカヒゲホソミドリカスミカメ	82.1	93.8	97.5	96	32.3	406.8	65.6	620	やや多
アカスジカスミカメ	66.7	75.0	95.7	78	6.6	99.0	96.1	103	平年並
斑点米カメムシ類	97.4	100.0	100.0	100	44.0	536.4	195.8	274	やや多

※平成30年7月9日～13日に、32地点で20回振りすくい取り調査を実施。発生頭数は1地点あたりの平均値。

※平年値は、平成20年～29年の10年間の平均値（調査時期：7月上旬～中旬）。

※斑点米カメムシ類は、上記4種及びその他斑点米カメムシ類の合計。



程度	無	少	やや少	平年並	やや多	多
平年比 (%)	0	1～19	20～59	60～140	141～180	181～
記号	×	△	○	◎	▲	●

図1 大型カメムシ類<sup>\*</sup>の地点別発生状況

※大型カメムシ類：クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ

図2 カスミカメ類<sup>\*</sup>の地点別発生状況

※カスミカメ類：アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ



写真1 斑点米カメムシ類

## 《防除対策》

### ○耕種的防除

水田内にイネ科、ホタルイ等の雑草が残っている場合は、斑点米カメムシ類を誘引するので除去しましょう。

水稲出穂2～3週間前に水田周辺の除草が済んでいる場合は、次回の除草を水稲の出穂期頃（除草したイネ科雑草が出穂する前）に行いましょう。なお、出穂期頃のための除草だけでは、イネ科雑草の穂に集まっていたカメムシ類を水田へ追い込み、水稲の穂を集中加害させることとなりますので、水稲の出穂期10日前までに除草を済ませましょう（詳しくは[病害虫防除対策のポインントNo.16](#)を参照）。

### ○薬剤防除

出穂期～穂揃期頃に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、望ましい防除時期として、液剤ならば**乳熟期初期（出穂期7～10日後）まで**、粒剤ならば**出穂期～出穂期の7日後まで**に防除しましょう。その後も斑点米カメムシ類が見られる際は、7～10日間隔で1～2回の追加散布を行いましょう。

粒剤はクモヘリカメムシ等大型のカメムシ類には効果が低いため、液剤での防除が効果的です。

表2 水稲のカメムシ類に登録のある主な薬剤(平成30(2018)年7月13日現在)

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期	本剤の 使用回数	成分	農薬の系統	IRAC コード
ダントツ粒剤	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	クロチアニジン	ネオニコチノイド	4A
スタークル液剤10	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	ジノテフラン		
スタークルメイト液剤10				2000倍	収穫14日前まで	2回以内
MR. ジョーカーEW	1000倍	収穫14日前まで	3回以内			
トレボンEW				1000～2000倍	収穫14日前まで	2回以内
キラップフロアブル						

注: RACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

※水稲の斑点米カメムシ類防除の薬剤がミツバチに被害を及ぼすことがありますので、養蜂家の方々へ農薬散布日を周知する等の積極的な対応をお願いします。

詳細は、農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせは「農政部ツイッター(@tochigi\_nousei)」、[農業環境指導センターホームページ \(http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html\)](#) でもご覧になれます。



6月～8月は「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。  
いつものチェック！ 農薬を使用する際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！

## イチゴ炭疽病、イチゴ萎黄病の発生に注意しましょう。

今年は、6月に梅雨明けするという異例の年になり、暑い夏が長く続く気象予報です。炭疽病、萎黄病は、高温多湿でより発生しやすくなりますので、今後の発生に注意が必要です。

### 1 炭疽病

苗をよく観察し、健全苗の確保に努めましょう。育苗期は本病の防除において重要な時期であることから、育苗期から予防を主体とした防除対策を徹底しましょう。



写真1 萎凋症状（本ぼ）



写真2 苗の斑点型病斑



写真3 苗の葉柄の病徴

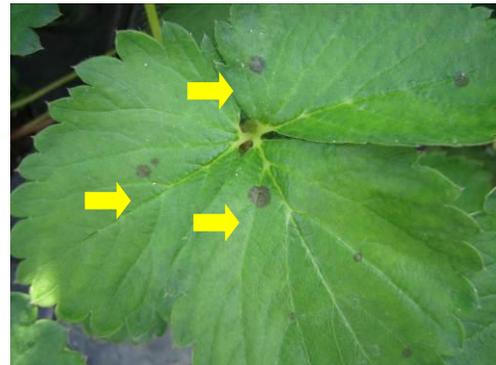


写真4 斑点型病斑の拡大図（黄色矢印）

### 【炭疽病の防除対策】

炭疽病は、育苗期の高温、多湿時に発生が顕著で、降雨やかん水による水はねによって病斑上に形成された分生子が飛散して伝染します。また、風雨が激しい場合や苗床が冠水した場合に、発生が多くなります。防除にあたっては下記のこと留意して下さい。

- (1) 水はねによって伝染するので、外部から風雨が当たらないようにする。
- (2) 頭上かん水は、本病の発生を助長するため行わない。
- (3) 高温多湿は、本病の発生を助長するため、夕方には地上部が乾いた状態になるよう、かん水の時間や量を調整する。
- (4) 発病株や感染が疑われる株は、早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。  
※罹病した葉や株は、ビニール袋内に密閉し、嫌氣的発酵処理を行う。
- (5) 予防を主体に薬剤を定期的に散布する（表1参照）。発生が見られる場合には、サンリット水和剤または、ゲッター水和剤を散布する。
- (6) 葉上に黒色小斑点（炭疽病の斑点型病斑：写真2，4）や萎凋症状（写真1）が見られる場合、その周辺の苗は病徴が見られなくても本病に感染している可能性が高い。そのため、発病株周辺の苗は使用しない。

表1 イチゴ炭疽病に登録がある主な薬剤

(平成30(2018)年7月31日現在)

薬剤名	希釈 倍数	使用時期 ／使用回数	成分 ／成分の総使用回数	薬剤系統名	RAC コード
キノンドーフロアブル	500～ 800倍	育苗期 ／3回以内	有機銅 ／3回以内	有機銅	F:M1
ジマンダイセン水和剤	600倍	仮植栽培期 但し収穫76日前まで ／6回以内	マンゼブ ／6回以内	有機硫黄	F:M3
アントラコール顆粒水和剤	500倍	仮植栽培期 ／6回以内	プロピネブ ／6回以内	有機硫黄	F:M3
ベルコートフロアブル	1,000倍	育苗期(定植前) ／5回以内	イミノクタジン ／10回以内※ <sup>1</sup>	グアニジン	F:M7
オーソサイド水和剤80	800倍	収穫30日前まで ／3回以内	キャプタン ／3回以内	有機塩素	F:M4
ゲッター水和剤	1,000倍	収穫開始21日前まで ／3回以内	ジエトフェンカルブ ／6回以内 チオファネートメチル ／4回以内※ <sup>2</sup>	N-フェニル カーバメート ベンズイミダ ゾール	F:10・1
サンリット水和剤	2,000倍	収穫前日まで ／3回以内	シメコナゾール ／3回以内	E B I	F:3
セイビアーフロアブル20	1,000倍	収穫前日まで ／3回以内	フルジオキソニル ／3回以内	フェニルピ ロール	F:12
ファンベル顆粒水和剤	1,000倍	収穫前日まで ／3回以内	イミノクタジン ／10回以内※ <sup>1</sup> ピリベンカルブ ／3回以内	グアニジン オキシムエー テル	F:M7・ 11
タフパール※ <sup>3</sup>	2,000～ 4,000倍	育苗期～収穫前日まで ／－	タラロマイセスフラバス ／－	微生物農薬	－

※<sup>1</sup> 育苗期は5回以内、本ぼでは5回以内。ベルコートフロアブルとファンベル顆粒水和剤は有効成分としてイミノクタジンを含むため、両剤の使用回数は合わせて前述の回数となる。

※<sup>2</sup> 種子への処理は1回以内、は種後は3回以内。

※<sup>3</sup> 微生物農薬であるため、他の殺菌剤との混用を避ける。

RACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

## 2 萎黄病

萎黄病は、土壌伝染し、ランナー内の導管を經由して感染します。導管の褐変に伴う新葉の奇形が特徴的な病徴です。気温は25℃以上で発生し、30℃以上になると多発しやすくなるため、高温期(育苗後半～定植1ヶ月後)の発生が目立つことが多く、乾燥などで根が傷みやすい環境下で発生が助長されます。

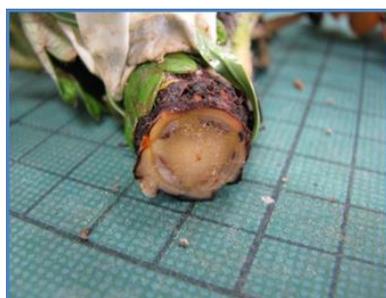


写真5 導管の褐変



写真6 苗での症状



写真7 葉の奇形(本ぼ)

【萎黄病の防除対策】

萎黄病は本ばに持ち込まないことが大原則です。感染が疑われる株は早期に処分することとし、ほ場外でビニール袋内での嫌氣的発酵処理をして、拡散を防ぎましょう。

防除にあたっては下記のことに留意して下さい。

- (1) 発病株や感染が疑われる株は、早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。  
※罹病した葉や株は、ビニール袋内に密閉し、嫌氣的発酵処理する。
- (2) 育苗資材の消毒  
資材に付着している土にも病原菌が残存できるので、資材の洗浄、消毒をよく行う。または、資材の更新も含めて検討する。
- (3) 育苗中で防ぎきれず本ばに持ち込んでしまった場合、作終了後には土壌消毒をしっかり行い、土壌消毒を行った後、未消毒の土を混入しないように注意する（本ば）。

表2 イチゴ萎黄病に登録がある主な薬剤

(平成30(2018)年7月31日現在)

薬剤名	希釈 倍数 (使用量)	使用時期 ／使用回数	成分 ／成分の総使用回数	薬剤系統名	RAC コード
トップジンM水和剤	300～500倍	仮植時及び仮植栽培期 ／3回以内	チオファネートメチル ／4回以内※ <sup>1</sup>	ベンズイミダ ゾール	F:1
ベンレート水和剤	500倍	育苗期 ／3回以内	ベノミル ／4回以内※ <sup>2</sup>	ベンズイミダ ゾール	F:1
クロルピクリン錠剤	(1穴あたり 1錠)	／2回以内(床土1 回以内、ほ場1回以 内)	クロルピクリン/3回以 内(床土1回以内、ほ 場2回以内)	有機塩素	I:8B
クロピクフロー	(20～30L/ 10a)	／1回	クロルピクリン/3回以 内(床土1回以内、ほ 場2回以内)	有機塩素	I:8B
ソイリーン	(20～30L/ 10a)	作付の10～15日前まで ／1回	D-D/1回 クロルピクリン/3回以 内(床土1回以内、ほ 場2回以内)	その他 有機塩素	I:8A・8B
バスアミド微粒剤	(20～30kg/ 10a)	仮植または定植21日前 まで ／1回	ダゾメット ／1回	その他	F:M03、 I:8F、H:Z

※<sup>1</sup> 種子への処理は1回以内、は種後は3回以内。

※<sup>2</sup> 4回以内(種子粉衣は1回以内、は種後は3回以内(苗根部浸漬は1回以内、本ば定植後は1回以内))

RACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

詳細は、農業環境指導センター (Tel 028-626-3086) までお問合せ下さい。

病虫害情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。



**6月～8月は「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。**  
いつものチェック！ 農薬を使用する際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！

# はんよう オオムギ斑葉病の発生が増えています

## 種子消毒を徹底しましょう！

近年、二条大麦で「オオムギ斑葉病」の発生が増加しています。本年5月に県内で実施した調査では、発生ほ場率が77.8%と、昨年から大きく増加しました（図1、2）。本病が発生すると、減収や品質低下が懸念されます。さらに、ほ場からほ場への感染の可能性があることや、種子伝染性病害であることから、大麦の採種ほ場がある地域では特に注意が必要です。健全な麦の生産に向けて、種子消毒を必ず実施しましょう。

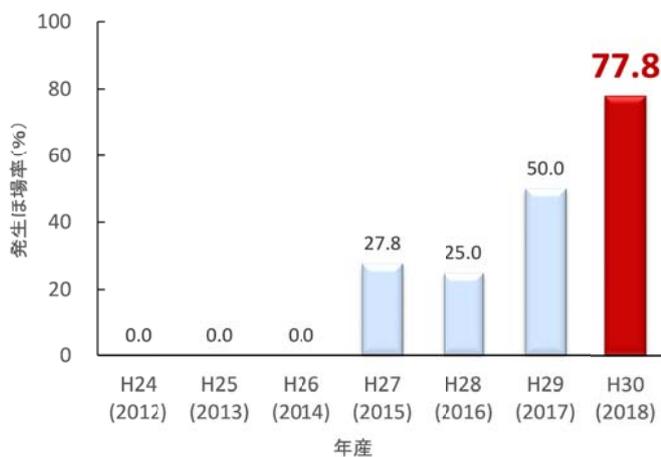


図1 県内におけるオオムギ斑葉病の推移  
※5月上旬調査、二条大麦（調査ほ場数：16～18）



図2 県内におけるオオムギ斑葉病の発生状況  
※平成30(2018)年5月上旬調査、二条大麦（調査ほ場数：18）

### 1 オオムギ斑葉病の特徴



写真1 オオムギ斑葉病（全身感染）



写真2 オオムギ斑葉病による穂枯れ

- 病原菌は糸状菌（子のう菌類）で、種子や被害茎葉上で菌糸、子のう胞子および分生子の形で生存し、播種した種子が発芽すると、その子葉鞘から植物体内に侵入し、大麦が15cm程度に生育してから発病する。特に二条大麦に罹病性の品種が多い。
- 病斑は葉、葉鞘に発生する。葉では初め淡黄色～黄白色の条斑を形成し、のちしだいに褐色となり、最終的には黒褐色の条斑となり枯死する。
- 種子の発芽期間中の温度が比較的低い時に、発病率が高くなる報告がある。

〈参考〉オオムギ斑葉病に似た病気  
「オオムギ黒節病」

～見分け方のポイント～

オオムギ斑葉病は全身感染で、1株全体の葉に条斑が現れる（写真1）。一方、オオムギ黒節病（写真3）も葉に褐色の条斑が現れるが、症状は部分的であり、節にのみ病徴が現れることもある。



写真3 オオムギ黒節病

## 2 オオムギ斑葉病の防除対策

- (1) 感染後の治療薬剤はないため、播種前の**種子消毒**を行う。
- (2) 遅播きすると発生が増加するため、適期に播種を行う。

オオムギ斑葉病に対する種子消毒の効果は、処理方法により異なり、一般的に

しんせきしより  
**浸漬処理** > 湿粉衣処理 > 乾粉衣処理 の順で効果が高い。

表1 オオムギ斑葉病に登録のある主な種子消毒剤一覧（平成30(2018)年8月末日現在）

農薬名 〈作物名〉	使用方法	希釈倍数 ・ 使用量	使用 時期	本剤の 使用 回数	成分	成分の 総使用 回数	FRAC コード*4
ベンレートT水和剤20 〈麦類〉	10～20分間種子浸漬	20倍	は種前	1回	チウラム	1回	M03
	6～24時間種子浸漬	200倍			ベノミル	1回	1
	種子吹き付け処理(種子消毒機使用)	7.5倍(乾燥種粉1kg当り希釈液30mL)					
	種子粉衣	乾燥種子重量の0.5%					
ベフラン液剤25(劇) 〈麦類(小麦を除く)〉	10～30分間種子浸漬	250～500倍	は種前	1回	イミノクタジン(酢酸塩)	*1	M07
	種子吹き付け処理又は塗沫処理	原液、乾燥種子1kg当り3～5mL					
ホーマイ水和剤 〈麦類(小麦を除く)〉	6～24時間種子浸漬	200倍	は種前	1回	チウラム	1回	M03
	種子粉衣	種子重量の0.5～1.0%			チオファネートメチル	*2	1
キヒゲンR-2フロアブル 〈大麦〉	塗沫処理	乾燥種子1kg当り原液20mL	は種前	1回	チウラム	1回	M03
ベンレートTコート 〈麦類〉	種子粉衣	乾燥種子重量の0.5%	は種前	1回	チウラム ベノミル	1回 1回	M03 1
トリフミン水和剤 〈麦類〉	種子粉衣	種子重量の0.5%	は種前	1回	トリフルミゾール	*3	3

- \*1 3回以内(種子への処理は1回以内、散布は2回以内)
- \*2 3回以内(種子への処理は1回以内、出穂期以降は1回以内)
- \*3 3回以内(種子粉衣は1回以内)
- \*4 FRACコードが同一のものは、作用点が同じなので連用を避ける。

詳細は、農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。

## イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の高い地点が確認されています

平成30(2018)年11月に実施した調査では、イネ縞葉枯病の媒介虫であるヒメトビウンカの越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は6.1% (県平均) でした (図1、表1)。県平均で見ると、直近3ヶ年の保毒虫率はおよそ平年並 (6~7%) で推移していますが、県中南部では依然として保毒虫率の高い (防除が必要とされる保毒虫率10%を超える) 地点が確認されています。

越冬世代幼虫の生息密度は43.0頭/10㎡と平年並ですが、今後の気象条件によっては、来春のヒメトビウンカ第一世代幼虫の発生量が多くなる可能性もありますので、注意が必要です。ヒメトビウンカは、再生稲やイネ科雑草に寄生し越冬します。そのため、今の時期に、再生稲発生ほ場の耕起や畦畔の雑草管理を行うことが、次年度のイネ縞葉枯病に対する有効な防除対策となります。特に、再生稲発生ほ場の耕起が未実施のほ場は、速やかに耕起を行い、ヒメトビウンカの越冬場所を無くすことにより、次年度の発病を抑えましょう。

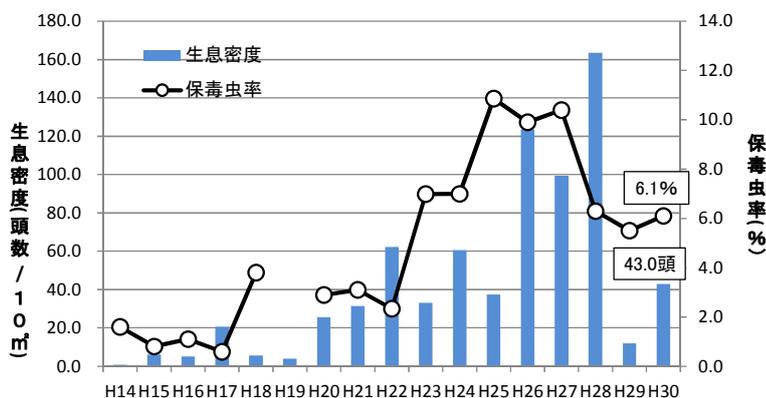


図1 ヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率及び生息密度の推移



写真1 イネ科雑草に寄生するヒメトビウンカ



写真2 再生稲で発病した縞葉枯病

表1 ヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率

越冬世代		(単位:%)		
地点名	H28 2016	H29 2017	H30 2018	
県北部	大田原市戸野内	3.1	1.0	1.0
	大田原市蛭畑	2.1	3.1	1.0
	大田原市親園	5.2	5.2	4.2
	那須烏山市滝田	4.2	5.2	3.1
	さくら市蒲須坂	0.0	4.2	3.1
	高根沢町花岡	2.1	5.2	6.3
県中部	真岡市青田	9.4	8.3	6.3
	宇都宮市横山町	6.3	3.1	9.4
	宇都宮市雀宮町	5.2	7.3	9.8
	上三川町上三川	10.4	7.3	13.5
	鹿沼市酒野谷	3.1	6.3	4.2
	県南部	下野市絹板	10.4	13.5
下野市小金井		10.4	11.5	5.2
小山市小葉		2.1	1.0	8.3
小山市石ノ上		16.7	8.3	10.4
壬生町助谷		11.5	3.1	4.2
栃木市惣社町		6.3	4.2	5.2
栃木市大平町真弓		5.2	0.0	1.0
栃木市藤岡町富吉		9.4	9.4	5.4
佐野市堀米町		4.2	6.3	10.4
足利市上洪垂町		6.3	2.1	3.1
県北部	2.8	4.0	3.1	
県中部	6.9	6.5	8.6	
県南部	8.2	5.9	6.7	
平均値	6.3	5.5	6.1	

注:検定サンプルは11月中~下旬に、水田畦畔や休耕田のイネ科雑草等から採取

検定方法:DAS-ELISA法 検定数:96頭/1地点

詳細は、農業環境指導センター (TEL 028-626-3086) までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。